卑弥呼

悲哀から目覚めへ

塩川香世

卑弥呼、悲哀から目覚めへ／目次

卑弥呼の生きた時代 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

⑴卑弥子と邪馬台国　6
⑵卑弥呼と三国志　8
⑶卑弥呼の時代の倭国　9
⑷巫女とは　15
⑸巫女病と沖縄　16
⑹巫女の役割　17
　①死者を神へと導く／②神の託宣を聞く／③予言者としての巫女／④戦争と巫女／⑤農業と巫女／⑥医者としての巫女／⑦収税者としての巫女／⑧航海の安全を祈る
⑺宮廷に仕える巫女達　26
おわりに　28

卑弥呼、悲哀から目覚めへ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

一　卑弥呼と言えば、どのような思いが湧いて出てくるでしょうか。　32
二　遠くに眺めている二上山は、何とも懐かしい山の姿でした。　37
三　卑弥呼の心を思います。　40
四　卑弥呼を題材にして、反省と瞑想の時間を持たれていると思います。　45

五　アルバートを呼び瞑想を重ねます。　47
六　私は卑弥呼と呼ばれた意識。　51
七　卑弥呼には昼の顔と夜の顔がありました。　54
八　間違った神を神として伝えてきた大きな過ちは……　56
九　卑弥呼。長い、長い時を経て私達は出会いました。　60
十　神のお告げの神とは何ですか。神とは存在するのですか。　63
十一　卑弥呼と呼ばれた意識へ。　66
十二　卑弥呼に思いを向けて、卑弥呼に私の心を語ります。　70
十三　卑弥呼を愛しく、愛しく、ただただ愛しい思いで……　72
十四　卑弥呼へ心を向けます。　74
十五　田池留吉を思い、卑弥呼を思います。　75
十六　私の中の卑弥呼を思い瞑想をします。　77
十七　卑弥呼と思いを向けることが嬉しかった。　79
十八　今、私の中に卑弥呼を呼んでみます。　82
十九　今もう一度、卑弥呼を思います。　84
二十　卑弥呼を、ようやく明るいところで語れることが喜びです。　87
二十一　卑弥呼よ、語りなさい。　89

卑弥呼の生きた時代

卑弥呼の墓といわれる箸墓古墳

「卑弥呼」と「巫女」、この二つのキーワードをベースに、自分の心と向かい合おうと多くの方々が、田池留吉先生のもとに、その成果を送ってこられました。

ここでは、塩川香世さんの「卑弥呼、悲哀から目覚めへ」を中心に、送られてきた「意識」や「反省文」を紹介すると共に、そのベースとなった時代についても、私見を交えて解説させていただきます。

冒頭の解説や図版では、巫女やシャーマンについての具体的なイメージを持っていただけるよう工夫しています。卑弥呼が抱えてきた心の世界の闇を知るうえでは必要のないことかも知れませんが、一般読者の目に触れることも考慮し、少しでも興味を持っていただけるよう、あえて掲載させていただきました。

ただ田池先生の許に送られてきた意識の資料については、あまりにも分量が多いため、塩川香世さんの「卑弥呼、悲哀から目覚めへ」以外は、すべてが収録できません。その一部分の紹介になることをお許しください。

(1) 卑弥子と邪馬台国

卑弥呼とは何者でしょうか？ 卑弥呼は、どこでどのようにして誕生したのでしょうか？

我々が卑弥呼について知ろうとした時、一体、どれだけの資料を持っているというのでしょう。

私たちが何かを知ろうとしたり、調べようとするとき、まず思いつくのが「本」という存在です。近代教育の恩恵とでもいうのでしょうか、私たちは、知識の根源、認識の基準を、まずは文字に求める習慣がついてしまいました。

ところが、「卑弥呼」や、彼女が統治したという「邪馬台国」について知ろうとする時、私達に与えられた文字情報は「三国志」の中の「魏志・東夷伝・倭人の條」、俗に「魏志倭人伝」と呼ばれる二千文字そこそこの情報にすぎないのです。

「いや、そんなことはない、世間には邪馬台国や卑弥呼に関する本があふれているではないか」、そう反論される方も、たくさんおられるに違いありません。

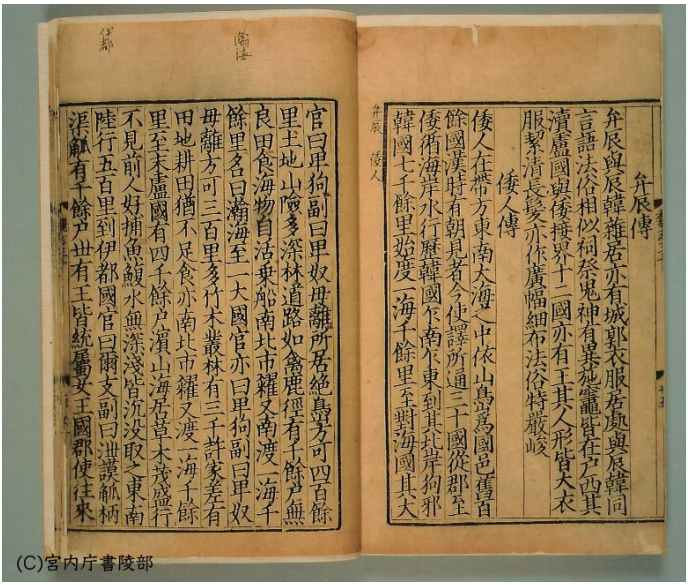
しかし歴史というのは根元主義を原則とします。さかのぼれる限り元の情報にさかのぼり調べていくということです。では根源主義とは何でしょうか？

噛み砕いて言いますと、例えばAさんが「Bという奴は悪いやつだ。夜には泥棒稼業もやっている。目撃者もいるから確かな話だ」と言っていたとします。それを伝え聞いた僕は、まずAさんに話を直接聞き、Aさんの言う情報が本人が確認したものかどうかを確かめます。

「いや、俺が見たわけではない。Cさんから聞いた話だが、どうも確かな話らしい」と言ったとします。そこで、次にCさんに確認を取ります。その結果、Dさんが目撃者らしいという情報を得た僕は、いよいよ情報の根元らしいDさんに話を

聞くことにします。

「いや僕はそんなこと言っていない。ある夜、通りがかりにFさんの家の裏口から慌てて飛び出してきた人を見た。翌日、彼の家に泥棒が入ったこ



(C)宮内庁書陵部

魏志倭人伝（宮内庁書陵部）

とを知り、てっきりあれが泥棒だと思ったんだ。そこで警察にも話したんだが、暗くてどんな人だったか分かるはずもない。でも、後で思ったんだが、近くに住むBさんと背格好が似ていたように思う。これは警察には話していないが、親しくしているCさんにだけは話したような気がする。」

このように、話の出どころにできる限り近づき真偽を確かめようとするのが歴史学のやり方です。年代や人物を暗記させるのが歴史教育の目的ではありません。人の話を鵜呑みにせず、必ず自分で確認し、情報の出所を探っていこうとする。そんな考え方を養うのが歴史教育だと思うのです。

話がとんだ横道に逸(そ)れてしまいましたが、「卑弥呼」や「邪馬台国」に関する限り、どの本もさかのぼっていくと、たどり着くのが、この「魏志倭人伝」ということになります。

つまり「魏志倭人伝」は、これ以上さかのぼることができない原点史料という訳です。同時代の

中国人によって書かれた原点になるわけです。だからと言って、書かれていることがすべて正しいとは限りません。そのことは容易に想像していただけると思います。

しかし、「嘘か真かわからないから」と言って切り捨てるのでなく、この史料を注意して読んでいけば、いろんなことが見えてくるし、いろんなひらめきが湧き上がってきます。

そこで、卑弥呼を知るために、まずは、この「魏志倭人伝」から、卑弥呼と邪馬台国について分かること、想像できることを考えていくことにしましょう。

(2) 卑弥呼と三国志

「三国志」と言えば、魏、蜀、呉の三国が、中国大陸の覇権を巡っての攻防を綴った歴史書です。蜀の諸葛孔明、劉備玄徳、張飛、関羽と言えば、歴史マニアでなくても知っているような英傑たちです。その同じ時代に卑弥呼が存在したのです。歴史学の恩師である大庭脩先生がこんなことを言っていました。

「卑弥呼が『魏』でなく『蜀』に使節を送っていれば、諸葛孔明と卑弥呼が会っていた、そんな事態が起こっていたかもしれない」と……。

もちろん歴史に「ｉｆ」はないのですが、この話は「卑弥呼」がどんな時代を生きたのかを、理屈でなく伝えてくれます。

「諸葛孔明」と「卑弥呼」、普段は並べて考えることのない二人ですが、彼らは、間違いなく同じ時代を生きた人間なのです。

そこで、「三国志」に描かれる騒乱の時代が、なぜ起こったのかを見ておかねばならないでしょう。同じ時代、倭国も騒乱の時代に入り、卑弥呼の登場により治まったといいます。中国では

魏の曹操が中国を統一し、卑弥呼は、その魏に対し使節を送り「親魏倭王」の称号を与えられ、邪馬台国による倭国統一の裏付けを与えられています。

中国と倭国、共に騒乱の時代にあったのです。では、その騒乱の原因は何でしょうか？ これは「三国志」にもにも書かれていません。ただ、中国について言えば、当時起こった「黄巾の乱」という大規模な農民反乱が、国の乱れる引き金となっています。これは太平道の教祖張角が起こした宗教一揆の形をとっていますが、食うに窮した農民軍を宗教家が扇動した騒乱であることに間違いはありません。では、なぜ食うに窮するような事態が起こったのでしょうか？

地球規模の寒冷化が原因です。これまで続いた温暖化が、この時期を境に寒冷化に転じています。温暖化が稲作の普及を勢いづけ、日本にも稲作が伝わり国のあり方を一変しようとしていました。そこへ寒冷化ばかりか湿潤な気候が乾燥型へと移行したのです。作物の不作が深刻化し、騒乱への引き金となっていきました。

日本（倭国）でも収穫物を奪い合い、豊かな土地をめぐっての争いが大小さまざまな規模で起こったに違いありません。「魏志倭人伝」に言われる「倭国大乱」の背景は、おおよそこのようなものであったに違いないのです。

ではなぜ、卑弥呼が現れて国が治まったというのでしょうか？

(3) 卑弥呼の時代の倭国

ところで当時の国という考え方は、今の感覚で考える国家とは大きく異なります。三国志に現れる、「魏」「蜀」「呉」という三国、これは今の感覚でいう国家と考えて間違いないでしょう。と

ころが「魏志倭人伝」に現れる対馬国であるとか、伊都国であるとか、邪馬台国ということになると、どうも倭国の中の部族的ものに該当するようです。倭国というのも、「倭国伝」ではなく、「魏志倭人伝」とあるように、ズバリ倭国という表現ではなく倭人の住む地域程度の表現になっています。しかも、これは今の日本列島だけをいうのではなく、韓半島の南部までを含めて「倭人」の住む地域と考えていたようです。

そんな倭人達が、韓半島の南部、日本列島で、百余国に分かれて争っていた。これが卑弥呼が登場するまでの倭国の状況だったようです。

ところが卑弥呼が現れることで、邪馬台国を盟主として、投馬国、不弥国、奴国、伊都国、末盧国、一支国、対馬国ほか二一カ国が連合するという邪馬台国連合あるいは倭国連合とでもいえるものが成立しはじめました。

では、なぜ卑弥呼は邪馬台国女王になれたのか、そればかりか部族間の争いをおさめて部族間連合を成立させ得たのか、という疑問が起こってきます。

いったい卑弥呼に、どんな力があったというのでしょうか？

これを考える上で、三つのキーワードが重要となってきます。一つは、地球自体の気候が「温暖化」から「寒冷化・乾燥化」に転じたこと。二つ目は「稲作」が日本に定着しはじめたこと。三つ目は、卑弥呼が「鬼道を能くすること」と表現されているように、ただの女王ではなく「巫女王」であったこと。

そこで「寒冷化・乾燥化」→「稲作の定着」→「鬼道を能くする巫女王」と並べてみると、ある答えが浮かび上がってきます。

稲作、水不足、雨乞い……

といっても、ただ祈るだけの雨乞いをしただけではないようです。いかに霊力が強いと言っても、

水祭りの復元模型と導水施設跡（橿原考古学研究所）

いつも雨乞いが成功するとは限りません。

次の写真を見てください。卑弥呼の時代より少し遅れますが、御所市は南郷大東遺跡から発掘された導水施設の跡と、導水施設を使った「水祭り」の再現の模様です。

ただ「雨よ、降れ」と祈るだけでなく、灌漑技術という裏付けを持った巫術です。灌漑用水を溜める土木技術という裏付けがあってこそ、卑弥呼は稲作をベースにした部族国家の首長となり得たのではないでしょうか。そして技術ばかりか、その技術を支える鉄をも支配しました。

「水」と「鉄」を支配することで、米の収穫を保証したのです。しかも連合する他部族に対し、水祭り（灌漑技術）を指導するばかりか、「鉄」の半島からの供給をも保証したのではないでしょうか。

この技術的な背景をもとに、「神の声を聞く」とか、「占い」であるとか、「雨乞い」であるとか、はたまた「敵を呪う」という巫術を繰り広げ、巫

鉄滓出土状況
纒向遺跡第 174 次調査

女王となっていったと思うのです。

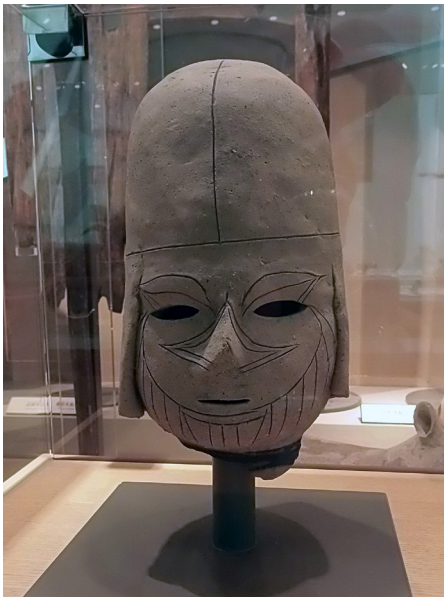
そこには政治を補佐したという男弟の存在を無視することは出来ませんが、ただそれだけではなく、卑弥呼という存在は、技術的先進国である中国或いは半島から、戦乱を逃れて一族で移住してきたものという推測が成り立つのではないでしょうか。あくまで推測ですが、歴史的に見ると、日本列島は、大陸や半島で何かあるたびに移民や難民を受け入れてきた土壌です。

「地獄の黙示録」という映画を観た方も多いと思いますが、ベトナム戦争で特殊任務をおびたアメリカ軍将校カーツ大佐が行方不明となります。この捜索に出た兵士が苦労の末、ベトナム奥地で見つけたのは、最新兵器を携え未開民族の王となって君臨していたカーツ大佐でありました……。

卑弥呼とどんな関係がある？ とお叱りを受けそうですが、このような状況が、古代の日本でも起こっていたと思うのです。

先ほどの「卑弥呼（ひみこ）」と「諸葛孔明（しょかつこうめい）」の例でも分かりますように、私達の認識というものは今の自分の状況を基に考えがちで、大きな錯覚を伴います。今、「卑弥呼」と「諸葛孔明」と並べ、それが同時代であると書くと、今度は卑弥呼時代の日本と、諸葛孔明時代の中国が同程度の文化レベルだと勘違いしてしまう方も多いに違いありません。

ところが事実は大違い。「魏志倭人伝（ぎしわじんでん）」から当時の日本の状況を見ると、邪馬台国（やまたいこく）へ向かう道程の記述のなかに「山は険しく、森も深く、道路は



鯨面埴輪（橿原考古学研究所）

鯨面の戦士（唐古・鍵考古学ミュージアム）

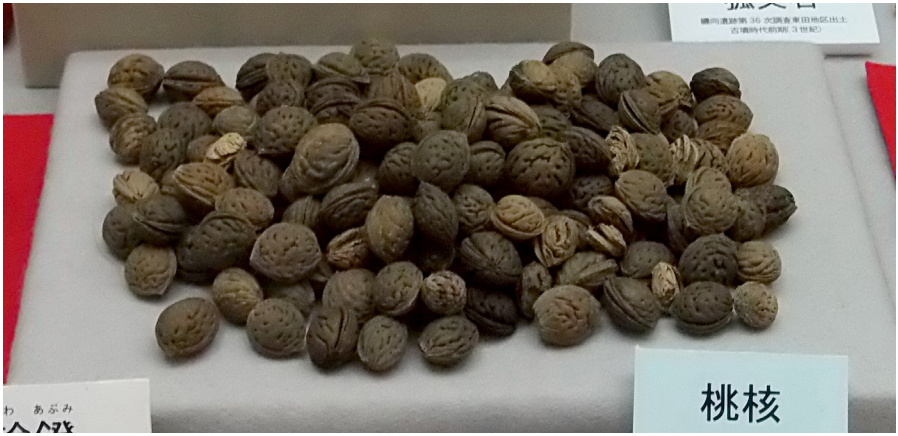
野性の鹿が通う小道のようです」とか「この地は草木が生い茂り、進めば進むほど前の人が見えなくなります」というような記述に出会います。

また「この国の男子は大人も子供も全員が顔や体に入れ墨をしています」とあります。写真は、埴輪に見られる鯨面（入れ墨）と、それを再現したミニチュアですが、今の日本人とは似ても似つかぬ有様。そんな中に少人数とはいえ、鉄の武器を携えた一団が現れればどうなるでしょうか。しかも彼らは製鉄技術や、灌漑用水や道路を敷く土木技術をも携えています。彼らは中国で起きた「黄巾の乱」の残党が逃れて日本に来たのかも知れません。とすれば、彼らは道教的な「懺悔による治病」を行い人心を掌握したのですから、大陸の最新技術（製鉄・灌漑・道路）と共に「病」の治療も「倭国」でおこなったに違いないのです。たちまちのうちに付近の部族を掌握したに違いありません。

卑弥呼が良くしたという「鬼道」とは道教のことだという説あさえある程です。この説を裏付けるように、近年発掘された纒向遺跡（邪馬台国の最有力候補地）から二千個を超える「桃の種」が掘り出されました。桃の種は「不老長寿」を願ったり、「魔」を払うという「道教」の儀式に使われるものです。

そこで卑弥呼ら一族を中国からの難民と仮定してみましょう。

卑弥呼ら一族は、まず韓半島を経て北九州に移住、周囲の相争う部族を懐柔し邪馬台国を掌握し、その巫女王となる。次いで政権を司る弟が、吉備国（岡山）と手を結び、近畿へと進出し倭国連合を形成する。



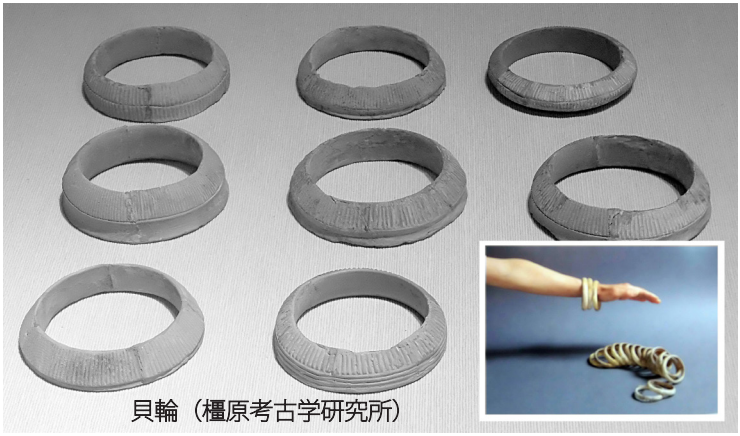
そのうえで鉄の流通を巡って反旗を翻した九州南部勢力・狗奴国と再び戦うこととなる。この戦いに際し卑弥呼は、再び中国は魏に使節を送っています。これに対し「魏」は、「黄幢」つまり黄色の軍旗を卑弥呼に送ります。この旗を連隊旗として用いることは、中国国王が背後にいることを示すものであり、卑弥呼は中国を後ろ盾に狗奴国を討とうとするのですが、この戦いのさなかに没してしまいました。

このように書いていくと、天孫降臨神話と似通っていると思われませんか。高天原からの

降臨は、半島からの移住に。天照大神（あまてらすおおみかみ）とスサノオの関係は、卑弥呼と男弟の関係に置き換えられます。しかも卑弥呼が死ぬ前には日食がおきていますから、日食と天岩戸も関係ありそう……。

卑弥呼が亡くなった後、「魏志倭人伝」によると、再び男王が立ちますが、やはり国が乱れたため、卑弥呼の後継者として「壹与（いよ）」あるいは「台与（とよ）」（ここでは台与で統一します）が巫女王として擁立されるということになります。

この後、大和朝廷がおこり古墳時代を迎えても、「姫彦制（ひめひこせい）」と言われる、女王が神事、男王が政治という体制はしばらく続くようです。



貝輪（橿原考古学研究所）

(4) 巫女（みこ）とは

古墳時代初期には、二つの石室を持つ古墳がよく見られます。それら一方の石室には「ゴホウラ」や「イモガイ」の貝輪を右手に多数装着した人骨が発掘されるケースが多くあります。

この貝輪は女性が腕にはめる装身具なのですが、それらを子供のときから右手に多数装着した人物というのは、通常の労働をしなくても良い女性司祭者でありました。

そしてもう一方の石室に葬られているのが男王である軍事的指導者です。

つまり一つの古墳に「神事を司る女王」と「軍事を司る男王」が共に祀(まつ)られているわけです。これが後期古墳になると夫婦が一つの石室に祀られるケースが出てきますが、この頃は夫婦でなく、姉弟あるいは兄妹というペアで祀られています。

このような形態を「姫彦制」というのですが、このような古墳に祀られるのは、いわば巫女と言っても女王と呼ばれるトップクラスの女性達です。

もちろん、その下に仕える巫女達も存在したわけで、以下は、そんな巫女達の姿を見ていくことにしましょう。

(5) 巫女病と沖縄

巫女病(みこやみ)という病があるそうです。思春期の女性に多く現れる精神性の疾患で、沖縄に多いと聞いています。統合失調症の一種で、神の声を聞いたり、自分とは違う人格があらわれたり、俗に言う神がかり的な現象に悩ませられ、沖縄では、これを克服すると立派なノロになるのだといいます。

「精神病」と「沖縄」がなぜ……最初そう思いましたが、調べていくうち、県外に比べ沖縄に精神病患者が多いのは、「宗教」と「精神病」というものが密接な結びつきにあり、そのことと関係しているらしいということがおぼろげながら見えてきました。つまり沖縄という宗教的な土壌は、霊的に過敏な女性たち、巫女的な人たちを多く生み出してきたということです。

そんな霊的に敏感な人たちが多く存在するということと、いわゆる精神病といわれる人たちが多く存在するということが比例しているのが沖縄という精神風土のように思われます。

ただ「沖縄海洋博」が開催されるまでの沖縄では、精神的に不安定な女性たちを特別視したり、隔離したりするということがなく、集団の中でご

く普通に生活し、普通に治癒していく人も多かったということのようです。

ところが沖縄海洋博が開かれるということになり、皇太子が沖縄を訪問されるということが決まったときに事情が変わってきました。今まで小集団の中で生活していた、そういう精神的に不安定な人たちが、「このままではまずい」と、精神科のある病院に収容されることになったらしいのです。今ある病院だけでは足りないので、新設の精神病院が数多く誕生したとも言われています。

巫女埴輪（高槻市埴輪工場公園）

なぜ、こんなことを書くかというと、古代でも同じことが起こっていたと思うからです。今以上に、古代は神とか霊とかに敏感な時代でした。女性は多かれ少なかれ、家庭とか地域という小集団の中で巫女的な役割を果たしていたようです。

そのなかでも特に霊的に敏感な人たちがいました。この人達は、思春期に「巫女病」と言われる症状を発症し、これを乗り越えて巫女となり、「部族」という共同体に受け入れられ祭り上げられました。乗り越えられなかった人たちは狂人となって、それでも部族の中で共同体の一員として養われていたと思われます。

⑹巫女の役割

では、村あるいは部族、あるいは国家という共同体の中で、巫女はどのような役割を負ってきた

のでしょうか。

①死者を神へと導く

日本の古代で「神」といえば、古くは自然そのものを崇拝するアミニズムが盛んでしたが、そこへ渡来系の人たちが増えてくるにつれ、先祖を神と祀ることが多くなってきました。

渡来系の人たちが村の構成要因の主体になってくると、死者は、村はずれに葬られるようになりました。それ以前は村の中心の広場に死者を葬る場所がありました。発掘された遺跡を見る限り、縄文人は死者を中心に、それを取り囲むようにして生活していたようです。先祖に護ってもらおうという思いがあったのかも知れません。その名残りでしょうか、先祖を神と祀る信仰と一体となり、やがて氏神という共同体の神が生まれ、それが共同体を守っていくという信仰が芽生えてきます。

沖縄では、「人家相継して七世に及べば、必ず神を生じて尊信す」と言われており、死んだ先祖の霊魂は、相当の年月と複雑な儀式を通して「神」に進化すると思われていました。

ただ放っておいて年月が経てば勝手に「神」になるというものではありません。その霊魂を指導し、神へと進化させる人間が必要になってきます。その儀式を執り行うのが巫女の仕事でもあったようです。

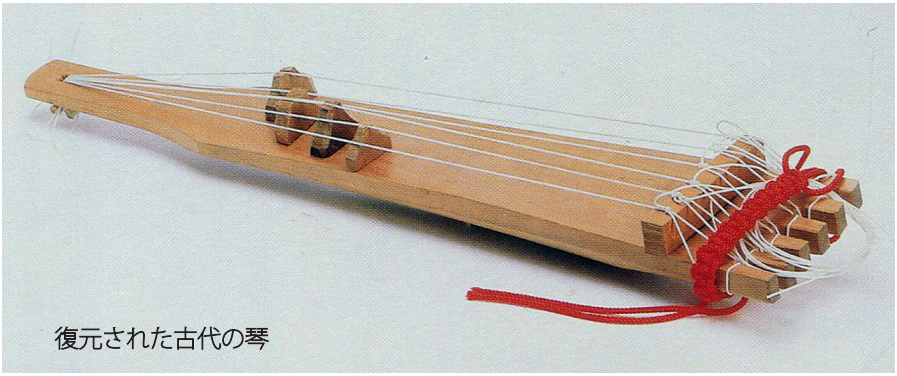
同様に一族のものが死ぬと、先祖神の許へ送り届けるのも巫女の役割のようでした。黙っていてはどこの馬の骨か分からぬ。そこで「いついつ死んだ某は、あなたの何代後の子孫でありますから、迎えていただきますようお願いいたします」、恐らく、そのようなことを言上げしたうえで、目印のための家印を付けて送り出したようです。この家印をつくるのも巫女の仕事でしたが、この家印が後々、家紋として発展していきます。

②神の託宣を聞く

高天原に在す神々を地上に降し、その神託を聞くことは神祭りを執り行う指導者として女王（巫女王）の重要な仕事でありました。そして、その神を降ろすために次の二つの方法があったといいます。

一つの方法は、蘿（ヒゲノカズラの古名）を襷掛けにし、真拆の葛を髪に挿したうえで、笹の葉を手に持ち、空の桶を伏せて、その上に乗って踏み轟かし、跳躍して神憑りの状態に入るというものです。

また、もう一つの方法は、まず吉日を選んで斎宮に入り、琴を弾かせ、審神（託宣を読み解く人）に問答体を以て託宣を聞かせました。その期間は七日七夜にわたり、



復元された古代の琴

託宣は韻文的の律語を以てなされたといいます。

分かりにくいので少し解説を加えておきます。一つの方法は、踊り狂うことで神憑り状態になる方法です。その小道具として、ヒゲノカズラを襷にかけ、ツルマサキという植物を髪に挿し、笹の葉を手に持って、空の桶の上に飛び乗って踊り狂いトランス状態に入って

琴を弾く男性の埴輪

いくものだそうです。

もう一つの方法は、吉日を選んで斎宮（いつきのみや）に入ります。斎宮は後々には、伊勢神宮に奉仕した斎王（さいおう）の御所を言うようになるのですが、この時代にはそのようなものはなく、祈りの場所、祈るための部屋ぐらいに考えておけば良いでしょう。その場所で琴を弾かせます。琴と言っても今のような大きなものでなく、手で持てるような小さなもの。これは鈴の場合もあるし、梓弓（あずさゆみ）と言って、弓の弦を鳴らす場合もあります。そのうえで審神（さにわ）を同席させ、問答形式で神の託宣を聞くというものです。その場合、託宣は唄の形式で語られます。

埴輪「王と巫女」

この唄の形式が後々、和歌へと発展していくことになるわけです。

③予言者としての巫女

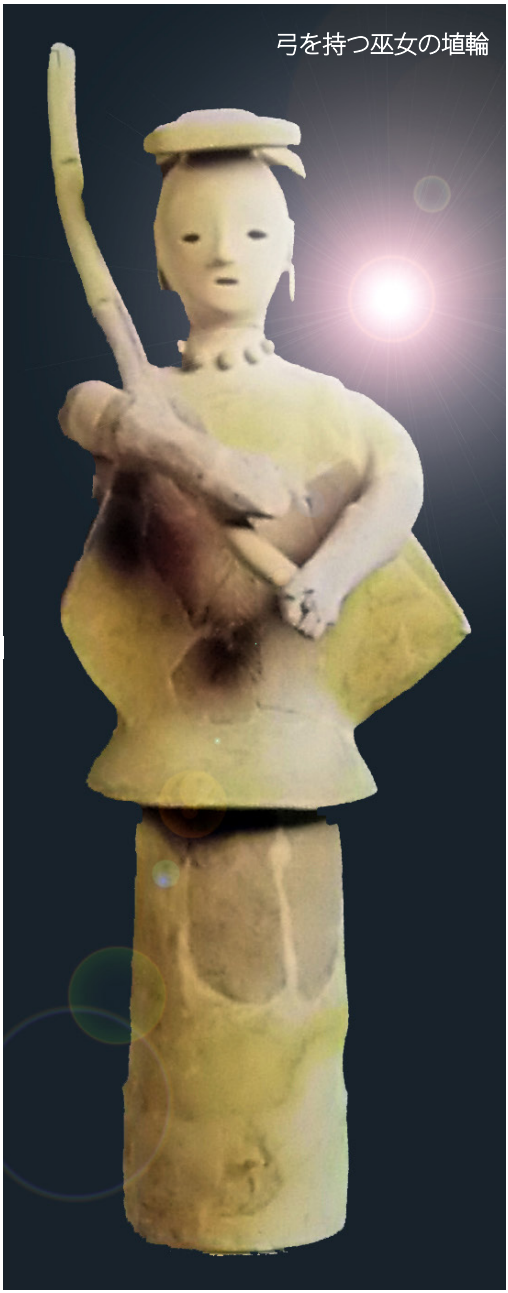
巫女の最も重大な役割が予言です。

天候、戦争、狩猟、疾病、航海等々、巫女が、あるいは巫女王が神聖なものとして崇拝されるのは、この予言をするためであり、これを完全に遂行するために、呪文（じゅもん）を唱えたり、神憑（かみがか）りの状態に入ったりするのです。

この方法は、霊媒者としての役割と重複しますが、預言もまた唄の形式で伝えられるため、歌謡体の文辞を綴ることが、巫女の修養の一つになっていきました。

④戦争と巫女

巫女は戦争の勝ち負けを占うだけでなく、戦争にも参加しました。


弓を持つ巫女の埴輪

後の古代豪族に物部（もののべ）氏という神事を司った一族がありますが、「物部」は「もののふ」という言葉に転嫁するように、物部氏は同時に軍事氏族でもあったのです。その物部氏に「八十少女（やそおとめ）」という巫女集団がありました。「八」は日本では最高数とか満数ということですから、実際に八十人いたということでなく、たくさんいたという程度に考えておけば良いでしょう。

この巫女集団は、戦争にあっては、戦場に臨んで兵士達の背後に布陣し、戦勝を祈り、口々から「フーッ　フーッ」と吐息して敵陣に吹きかけます。これによって相手を呪詛（じゅそ）すると共に、味方の士気を鼓舞（こぶ）したというわけです。

⑤ 農業と巫女

灌漑用水の例でも見ましたように、米の収穫高

イコール国力になるのですから、国にとっても農業は最も重要な事業となります。灌漑用水のため溜池をつくるのはもちろん、「穀物神」、さらには米の収穫を左右する天候を司る神々、たとえば「水は広瀬神」、「風は龍田神」、「雨は丹生神」を祭り、これら神々の荒ぶることを恐れて、専らそれを鎮めるべく呪術的祭儀が工夫されました。時には荒ぶる神を鎮めるために人身御供さえ辞さなかったようです。

この祭儀に、巫女王や巫女が関わったことはもちろんですが、巫女自体が人身御供にされることもあったと思われます。ただし、巫女が犠牲になった事実は、文献をはじめ考古学的資料、民俗学的資料をもっても証明することは出来ません……。

卑弥呼の衣装復元（大阪弥生文化館）

⑥ 医者としての巫女

卑弥呼のところでも見たように、道教には、懺悔によって病を癒やすという医術があり、これによって「太平道」の教祖・張角が人心を収攬し「黄巾の乱」を起こしました。黄巾の乱は鎮圧されたものの、これによって中国国内は乱れ三国鼎立の時代を迎えます。このとき発生した中国難民のうち日本に移住した

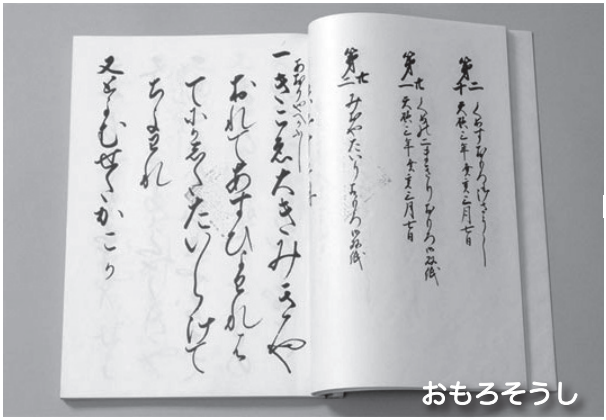
者が少なからずありました……。

時を同じくして、百余国が争う倭人の国が、その一国である邪馬台国に、女王卑弥呼が忽然と登場することによって統一されたのです。

そこで卑弥呼一族は、中国からの帰化人ではないか。灌漑技術と冶金技術、さらに医療行為によって、人心を掌握していったのではないかというのが僕の考えなのですが、こういった医療行為が持ち込まれる以前にも、病を呪いで治す行為のことを「クスル」（薬の語源）というように、神憑りによる医療行為が存在したことが明らかになっています。

そこで巫女による医療行為を見てみると、薬などは使わず、単なる祈祷か呪術によって「病」を癒やそうとするものと、祈祷と平行して薬となるものを与えるという方法がとられていました。その薬となるモノも、神に捧げたモノ、いわゆる「お下がり」を薬代わりにするモノと、純粋に薬草などを与えるモノがあったようです。

さらに古代人の遺骨に頭頂骨を穿たれたものがありますが、これは憑依などが原因の病に対し、医療を目的とした呪術として行われたようであり、その施術は巫女によっておこなわれたのではないかと言われています。



⑦ 収税者としての巫女

税という字は扁の「禾」は稲を意味し、作りの「兌」は冠を被った人の意味。即ち神に仕えた巫女が、民衆から稲を収めさせたのが「税」の字の起りだそうです。

古代にあっては、巫女の収税

は、神への「いやじり」の名で行われました。つまり神の保護を受ける為に捧げる誠意の発露として布帛や米などを納めたというのです。

このような経緯から、時が進み、「租・庸・調」の法が確立し、収税の官吏が設けられるまでは、巫女が主として徴税の職務にあたっていたと考えられます。

ここでまた沖縄の話なのですが、沖縄のオモロ（神歌）「しよりゑとのふし」の一節に、

「かまへつで、みおやせ、あけしのの、おやのろ」

というものがあります。

いとも頼りない訳ですが、「租税を積みましょう、あけしのの、大祝女に」という位の意味だと思うのですが……、要は、同地の巫女が租税を取立てて歩いたことを語ったものだというのです。

何かというと「沖縄」の話をいたしますが、それは沖縄には、内地の古俗が、そのまま化石化して残っていると言われているためなのです。

---

⑧航海の安全を祈る

航海の安全については「持衰」というものが「魏志倭人伝」に記されているので引用しておきます。

「倭の者が船で海を渡る時は持衰が選ばれる。持衰は人と接せず、虱は取らず、服は汚れ放題、婦人を近づけず、肉は食べず、まるで死んだ人間のようである。船が無事に航海できれば褒美が与えられるが、船に災難があれば殺される」と。

この場合、「持衰」とは「婦人を近づけず」とあるように男の役割で、巫女とは違います。僕自身、船には女性を「けがれ」があるから乗せないのだと理解していました。ところが、このような考え方は近世のモノであって、古代の航海では、この反対に、遠路の航海には、必ず女性を同船させる慣習となっていたようです。持衰が船艙に閉じこもり、船内の悪や汚れを一身に吸着させ、船を神聖な空間に保つ役割を果たしていたのに対

し、巫女は航海の安全を祈願する役割を果たしていたのでしょう。

しかし、船が海難に遭えば、持衰は「不摂生をしたためだ」と殺されますが、そのとき巫女はどうなったのでしょうか……。

ところで旅の安全を願う思いは、洋の東西を問わず、どこにでもあります。それを誰が願ってくれるかと言ったとき、世界的に、それが女性であるときが圧倒的に多いのを感じます。

昔、仕事で何度かネパールへ旅行しましたが、ネパールの友人の家では、彼の家のお婆さんが巫女の役割を果たしていました。僕たちがネパールを離れ日本へ帰るときは、その友人の家に必ず招かれ、お婆さんが巫女として道中の安全を祈願してくれるのです。その儀式の最後には、赤いティカという小麦を練ったようなものを額に付けてもらい、これで儀式は終了します。ティカはすぐ落

ちるのですが、その跡が赤く残り、額に赤い印を付けたまま日本へ向かうことになります。これはこれでネパール国内や空港では便利です。何をしてくれるわけでもないのですが、この印があると、役人はじめ、みんなが親切に接してくれるというわけです。

(7) 宮廷に仕える巫女達

邪馬台国が大和朝廷へと律令国家への道を歩み出すに伴い、土俗の中で発生した巫女達もいつしか国家体制の中へ組み込まれていきました。

それは既に、卑弥呼が部族間の連合を進める中でも起こってきています。

卑弥呼について「魏志倭人伝」は次のように記しています。

「その國、本また男子を以て王となし、住まること七、八十年。倭國乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王となす。名付けて卑弥呼という。鬼道に事え、能く衆を惑わす。年已に長大なるも、夫婿なく、男弟あり、佐けて國を治む。王となりしより以来、見るある者少なく、婢千人を以て自ら侍せしむ。ただ男子一人あり、飲食を給し、辞を伝え居処に出入す。宮室・楼観・城柵、厳かに設け、常に人あり、兵を持して守衛す」と。

卑弥呼は、この頃すでにかなりな年齢だったようです。夫もおらず、弟が政治を助けていましたが、誰に顔を見せるわけでもなく、千人近い侍女達がいますが、ただ一人の男性が卑弥呼の食事の世話等をしていたといいます。

男弟と一人の男性、気になるところですが、それより何より「婢千人」とあるのがもっと気になります。彼女たちは一体何をしていたのか、ただ侍女だけではないような気がします。卑弥呼の死後、男の王が立ちましたが、再び国が乱

れたので、卑弥呼の後継者として「台与（とよ）」が巫女王になったといいますが、卑弥呼と血のつながりはないようです。

おそらく卑弥呼の周りには、巫女達の組織が出来ていたのだと思います。年老いて若い頃のようには霊感も働かない。卑弥呼が祈りの場に籠もることはあっても、卑弥呼に替わって神託を受ける巫女達が共にそばに控え、しのぎを削っていたに違いないのです。

その中から次の「卑弥呼」（台与）が登場してきました。

その後、「姫彦制」という政治形態の中で、大王（未だ天皇という称号は登場していない）の姉なり妹が、巫女王として神事を司るようになりますが、彼女は果たして卑弥呼のような霊能力を有する巫女だったのでしょうか。それとも後の斎王（さいおう）（伊勢神宮の天照大神をまつる皇女）のように飾

弥生時代の巫女（橿原考古学研究所）

りものに過ぎなかったのでしょうか。

いずれにせよ、その下には、しのぎを削る巫女達の一団があったに違いありません。共同体の中で自然発生した「原始的シャーマン」としての巫女達の姿は、すでにそこに見ることはできませんでした。

古墳時代の馬（近つ飛鳥博物館）

おわりに

気候の寒冷化、乾燥化は、農耕民ばかりか騎馬民族にも深刻な影響を与えました。

馬という動物は消化器官が肛門のすぐ近くについており、栄養分の七十～八十パーセントを消化せず排泄してしまうといいます。馬糞が肥料に適すると言われるのはこのためだそうです。

これに対し、牛というのは徹底的に栄養を吸収するように出来ており、馬とは逆に七十～八十パーセントを吸収し、残りを排泄します。したがって牛糞は肥料に適さないのだということです。

なにも肥料の話をしようというのではありません。馬は、このような体質から、絶えず食べ続けなければならないということです。それが寒冷化・乾燥化で牧草が奪われると、食いだめの出来ない馬がまずやられるということになります。

こうして騎馬民族の移動がはじまります。

倭国にもこうして騎馬民族の一部が渡来してきました。同じように、韓半島では鉄を精製するための森林資源が枯渇し、これを求めての移動も目立ってきました。いつしか倭国の原住民達は、新来の渡来人達に取って代わられていきます。このようにして、邪馬台国も、大和朝廷も、渡来人の主導で成立していきました。

その大和朝廷が、中央集権体制を進めるうえで最大の障害となったのが、地方の部族・豪族の存

斎王の再現（三重県　斎王祭り）

在でした。邪馬台国も、その延長として誕生した大和朝廷も、部族の連合によって生まれた連合国家です。中央集権体制に移行するには、部族の力を抑えなければなりません。

先にも挙げたように、地方豪族の「神」といえば先祖神を言います。部族ごとに、自分の先祖こそ、自分達の神こそ勝れていると信じています。大和朝廷が中央集権国家を目指すためには、この部族ごとの神々を再編成する必要がありました。

このようして各地の豪族・部族に「風土記」の作成・提出が求められ、それを許に「天照大神」を頂点にした「天孫降臨神話」というストーリーが組み立てられたのです。そして各部族の貢献度により、キャスティングがおこなわれました。

神々の中央集権化が実施されたのです。

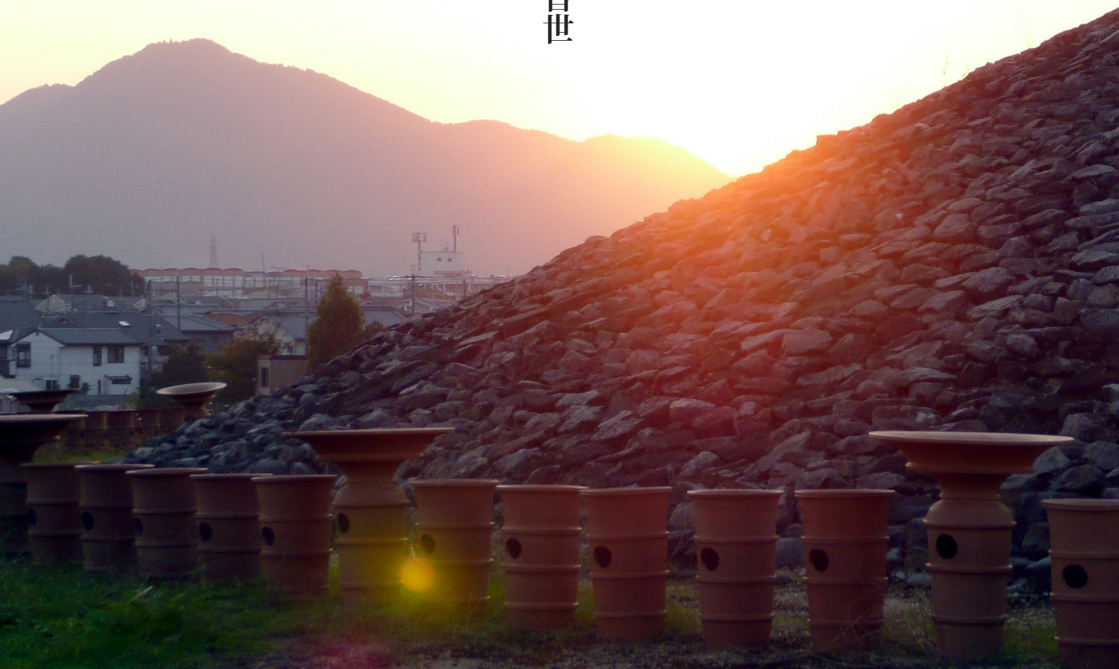
次に、こうしてできたピラミッドの上に、神事・軍事・政治を一元化した「神としての天皇＝天武天皇」が乗りました。神の下にあるのでなく、天照大神までを傘下（さんか）に組み込んだ「天皇＝神」という絶対専制君主が誕生したのです。

巫女王（ふじょおう）の存在も「斎王（さいおう）」という飾り物となり、それに仕える宮廷巫女も、また新たな時代を迎えることとなります。

（文責／桐生敏明）

卑弥呼、悲哀から目覚めへ

塩川香世



一　卑弥呼と言えば、どのような思いが湧いて出てくるでしょうか。

卑弥呼、卑弥呼、卑弥呼。語りたくない言葉でした。一方では語りたかった言葉でした。卑弥呼と呼びたかった。卑弥呼を認めさせたかった。我は卑弥呼なりと認めさせたかった。そんな思いが湧いて出てきます。

卑弥呼は素晴らしい者として、権力も何もかもその手中に収めました。

確かに卑弥呼は存在していました。卑弥呼と呼ばれる意識は存在しています。

我は卑弥呼なり。そんな思いの中で転生を繰り返してきた、たくさんの意識達に、今、告げます。卑弥呼の思いを語りなさい。卑弥呼に思いを向けなさい。卑弥呼は素晴らしき者ではございません。

卑弥呼の語る言葉、卑弥呼から出るエネルギーは真っ黒です。しかし、卑弥呼は崇められました。崇め奉られました。

そして、その陰でどれだけの巫女が地獄の日々を送ってきたか。

卑弥呼になりたかった巫女たちの思いを今、ここに記しなさい。

卑弥呼は巫女の頂点ではありません。しかし、巫女はそのように思い、自分を叱咤激励（しったげきれい）し、我の

霊能力を高めるために、どんな苦難にも挑んでまいりました。
霊能力です。パワーです。卑弥呼の地位を我がものにしたかった。卑弥呼は素晴らしき者と、それぞれの心に培ってきました。
卑弥呼は存在しますか。
卑弥呼は、あなたの心の中に存在する「我一番、我を敬え、我を認めよ、我こそ素晴らしき者」、その意識の象徴です。
卑弥呼という人間は確かに存在していたでしょう。しかし、その者もまた己の出したエネルギーの中で地獄を見てまいりました。
地獄、地獄、地獄。すべてが地獄でした。
権勢を誇ってきた、財力を手にしてきた、すべてを己の意のままに操ってきた、その世界はたちまち闇黒の世界へと変わっていきました。
いいえ、変わっていったのではありません。そこが闇黒の世界だったことに気付けなかっただけです。
愚かな、愚かな心の持ち主。意識の世界は暗闇の世界、哀れな世界。
己を知らずにきた哀れな卑弥呼の思いを、それぞれの閉ざされた心の中から叫んでください。卑弥呼は素晴らしい者ではございません。卑弥呼は哀れな存在です。
しかし、その卑弥呼の意識も、愛に目覚める時がやってきたんです。温もりと喜びの中にあった

自分だったと、そう、それぞれの心の中の卑弥呼に伝えなさい。ともに帰れることを伝えなさい。
卑弥呼、ああ卑弥呼。語りたくない思いがあります。語らせてくださいという思いも来ます。
心をしっかりと、温もりに、喜びに愛に向け、これからの時間、卑弥呼を語ってまいります。

私はたくさんの霊能者を引き入れてきました。心の中でたくさんの霊能者を使ってきました。その霊能をもって私の権勢を誇ってまいりました。卑弥呼の力を示したかった。霊能力に長けた者を起用しました。
寵愛(ちょうあい)しました。私のもとに侍(はべ)らせました。卑弥呼は素晴らしいと、そしてすべての権力をこの手の中に収めたかった。
権力を集めれば、私は素晴らしい人間になる。私は神に選ばれた者。
私のもとにすべてを侍らせていきました。私の支配下にすべてを置きたかった。
霊能力者、いわゆる神のお告げをする者、巫女。巫女を私の手中に収めました。巫女の言葉を私は利用してきました。政治に、国を統一するために利用してきました。
私の役に立たない巫女は即刻、首を撥(は)ねました。その命を簡単に奪い取りました。たくさんの巫女を殺してきました。巫女を一人の人間だと思ってきませんでした。私の奴隷、私の僕(しもべ)でした。私は巫女たちの思いを全く受け入れようとはしませんでした。ただ私は、私が素晴らしい者として頂点を極めたかった。そのために巫女の力を利用してきました。巫女の力を利用しながら、私の地位

を大きく、大きく、大きく、この天まで届けと大きく伸ばしていきたかった。そして、盤石(ばんじゃく)なものにしたかった。

巫女の恨み辛みを一身に受けました。しかし、私はそんなもの、ものともしなかった。私は選ばれた人間です。素晴らしい、すべてをこの手中に収められる人間なんです。巫女の一人や二人、いいえ、十人、百人、千人、もっと、もっと多くの者が、私のもとに侍(はべ)りました。権勢を誇ってきました。卑弥呼の名を全国に響き渡らせたかった。いいえ、海を越えて、あの海を越えたあの国へも、私のこの名前を広めたかった。私の野望は尽きることはありませんでした。

この身をどこまでも大きく、大きくしていきました。そのためには何だって利用してきました。

私は素晴らしき者。たくさんの巫女の犠牲の上に私は権勢を欲しいままにしてまいりました。

私の人生は素晴らしいものであらねばなりませんでした。

私は卑弥呼の意識に思いを向け淡々と語ります。卑弥呼を淡々と語っていきます。私の中に卑弥呼の思いが喜びへと変わっていく様を感じています。田池留吉、アルバート、愛の方向に向けながら、卑弥呼を淡々と語っていける喜びを感じます。

ありがとうございます。卑弥呼の意識は、真っ暗な、真っ黒な、どうしようもない苦しみの中に落ちて、落ちて、落ちまくりました。

しかし、私は今世、こうして肉体を持ち、卑弥呼の思いを心に感じ、そして、卑弥呼の思いを心

に語り、この思いとともに母なる宇宙へ帰れる喜びを伝えていきます。伝えることが喜びです。

卑弥呼へ思いを喜びで向けていきます。卑弥呼を喜びで語っていきます。どうぞ、皆さんも、淡々と卑弥呼を語ってください。

卑弥呼は間違ってきました。それぞれの心の中に作ってきた卑弥呼の思い、卑弥呼の意識、その切々と語る卑弥呼に心を向け、どうぞ、あなたの心から吐き出していってください。

卑弥呼は待っています。心を温もりと優しさで包んでくれるのを待っています。それぞれの心の中の卑弥呼をどうぞ、どうぞ、優しく、優しく包み込み、卑弥呼の心を聞いてあげてください。

巫女が帯びる呪具

六鈴鏡
右の巫女埴輪が腰に帯びている丸いもの
（東京都大田区 西岡第28号古墳 六世紀
慶應義塾大学民俗学考古学研究室　蔵）

二　遠くに眺めている二上山は、何とも懐かしい山の姿でした。
あの山をそんな思いで眺めながら、
私は今世、何度、あの道を通い続けてきたことか。

何度も、何度も歩きました。大神神社から石上神宮まで。二上山を眺めながら。
卑弥呼、邪馬台国、飛鳥というほうに意識を向ければ、あの辺りが妙に懐かしい思いとともに思い出されます。私はあの道が好きでした。あの一帯にこの肉体を運ばせました。二上山を眺めながら歩く道が好きでした。
それは肉でこの学びと出会う以前の話です。

ああ、卑弥呼よ、卑弥呼。私の中の卑弥呼の思いを心に感じています。
卑弥呼よ、あなたも苦しかったでしょう。とても、とても苦しかったでしょう。寂しかったでしょう。あなたは孤独でした。どんなに権力を手にし、財力を手にし、すべてを支配下に置き、その名を轟かせても、あなたの心の中の闇は深遠でした。
どんなに神に選ばれた者だと自分の中から聞こえてきたとしても、それはとても、とても苦しみ

に違いありませんでした。

今、卑弥呼という意識に心を向けることにより、この日本の国、そして世界中の意識の変化がうかがえます。

卑弥呼の持つ力、卑弥呼の流してきたエネルギーを、それぞれの心の中で愛に目覚めさせていく喜びへと繋がっていけば、心の中の重りが軽く、軽くなっていくのではないでしょうか。

卑弥呼とは、それぞれが心につかんできたエネルギーです。

神より特別に選ばれたとする選民意識の象徴として、その意識を助長するものです。我は素晴らしい、我は一番なりという、本当に高い、高いそびえ立つ意識を、卑弥呼というエネルギーは助長していきました。

どの国においても、何時(いつ)の時代においても、卑弥呼に代わる存在を、人々の心は作り上げてきたと思います。

まず卑弥呼の心を、それぞれの心の中に確認し、その心、その意識の世界をマイナスからプラスへ変える、いわゆる反転の作業をして、愛へ目覚めさせていくこと、そのことをやってまいりましょう。

卑弥呼という存在は、ブラックです。その霊能力はブラックです。

マイナスのもとで求める霊能力はブラックです。すべては愛の中にあることを忘れ去ったからです。

己、己、己の中で、ただ我一番を競い合う中で生まれてくるエネルギーは、本当に大きなブラック、

マイナスのエネルギーでしかありません。

その間違いを今世こそ、自分の中でストップしていきましょうということで、私達は、田池留吉のもとに集ってきたのではないでしょうか。

それぞれ、心が敏感な状態で、いわゆるチャネリングができるという肉の状態を整えて、田池留吉のもとで学ぶチャンスを自ら用意したのではないでしょうか。

同じ轍（てつ）を踏むなということを何度も聞いてきたはずです。

しかし、いかに、喜びと温もりへ自分の心を向けていくか、マイナスからプラスへ、本当に喜びの自分を見出していくか、ということの難しさも身にしみて感じているはずです。

その難しさを自分の中でしっかりと確認して、だからこそ、本当に今世こそ、自分の中に、大きな方向転換を促してまいりましょう。

今、卑弥呼に心を向けるこの機会は、大きな勉強の機会だと思います。卑弥呼に意識を向けて、卑弥呼の心を得意げに語るのではなく、その語る自分の中の卑弥呼の思いを、どれだけ自分の中で喜びと温もりで包んでいけるか、マイナスからプラスへ転じていけるか、そちらのほうに心を向けていってください。

得意げに語る思いを心に感じてくれば、その思いは反転です。

そういうことを学ぶために、今、卑弥呼に思いを向ける学びの機会が、それぞれに用意されているのだと思います。

三　卑弥呼の心を思います。

神に一番近い者。神に一番愛された者。そのように私は皆から崇め奉られた。そのように心の記憶として残っています。

心の中に神より選ばれし者、私はその思いを強く、強く秘めたまま、この身を捨てました。そして、私は自分の真っ暗な、真っ暗な中に真っ逆さまに落ちていきました。そこは何も、何もありませんでした。本当に何もなかった。何もないけれど、私の中の苦しみが私に覆いかぶさってきたんです。私は冷たく、冷たく凍えて、凍えて、小さく、小さく凝り固まりました。私の誇ってきたものは何だったのか。私の頼みの綱としてきたものは何だったのか。

私の母を思いなさい。お母さんを思ってごらんなさいと、そんな心に届く声があるけれど、私は母を思えずにいます。私は母を思えずにいます。私には母はいない。いいえ、いないと思いたかった。私の母はとてもとてもこの素晴らしい私からすれば、とても、とても、とても信じられないほどみすぼらしい母でした。私の母親はみすぼらしい母でした。どうして、あの母を自分の母だと言えるのでしょうか。母を思うことなど私にはできません。

卑弥呼の心の中は真っ黒な、真っ黒な中にありました。母を思えない卑弥呼が、ずっと、ずっと長い、長い時をかけて、存在しているんですね。宇宙に存在しているんですね。私はその卑弥呼の心の中に、この思いを届けます。

「私の中の喜び、温もり。あなたの中の喜び、温もり。一つなんです。心の中にあったんです。私達は一つなんです。お母さんはあなたにそのことを伝えてくれていたはずなんです。

あなたは、卑弥呼という一つのちっぽけな肉にとらわれて、そこから自分を解き放すことができませんでした。あなたはそれから以後、何度も、何度も肉体という形をいただく、つまり転生の機会を持っていったことでしょう。しかし、あなたの心は依然として真っ黒な中に固まったままでした。

私は、今、あなたにそのように伝えます。

卑弥呼という心を自分の中から解き放していくこと、それがあなたの喜びなんです。幸せなんです。それしかあなたは自分で自分を救う道はございません。」

苦しい中ですが、私は本当に間違ってきたことを語りたいと思いました。卑弥呼に心を向けなさいということです。そんな私の中を私は語らせていただける今があるんですか。私は卑弥呼という意識をたくさん、たくさん抱え持ってきました。

卑弥呼よ、あなたは神に選ばれし者だと自分を主張しております。それがあなたの心の中にしっかりとあることを感じます。

それでは、あなたが神より選ばれし者という、あなたにとっての神とは何なのでしょうか。あなたは何をもって神と言うのでしょうか。

神とは素晴らしい、大きな、大きなすべてを包み込む力を持った存在です。神は目に見えません。だから、私は神に選ばれたということを自分の中から聞いたとき、私は神になれる、私は神の化身だと思ってきました。私の中には神が存在する。神と一つになる。神を求める思いは、とても崇高なものでした。この力をもってすれば、すべてを支配できる。いいえ、支配というのではなく、私は喜びに導いていけることを、本当に信じていたんです。大きな力でもって、すべてをその傘下に収めていくことが、この世の喜びに繋がっていくと思ってきました

だから、私はその大きな力を、パワーを、神と思ってきました。

それが何なのか。具体的に私の心の中には分かりません。しかし、神は存在することを、私の中にはしっかりと抱えています。神は存在する。神とは素晴らしい崇高な存在であった。汚されてはならない。

私は神の化身でした。私は崇高な存在。崇高な心の持ち主。崇高な私は素晴らしい、そのように自分を称えてきました。

神とは私でした。そう、私は神に成り代わって、すべてを支配下に治めるべき存在。私の存在はとても大きな存在でした。

そんな心を抱えて、私はすべての人に接してきました。心の中には苦しい思いが溢れているのに、私は、そのことに一切気付けずに、私は素晴らしいと心から上がってくる神の声を信じて、信じてきた愚か者です。

私はこの身を捨てて感じました。私が握ってきた神。私が信じてきた神。私の中の苦しみは何なのか。この苦しみは何なのか。ああ、語ることすらできない。この心は固まっていきました。

今、卑弥呼のほうに心を向けて、卑弥呼の心を語りました。卑弥呼という特定の意識に限らず、神を、自分の中の神を信じてきた意識に、ほぼ共通する思いだと思います。

そんな中で、私達は肉を持って、田池留吉、アルバート、この喜びと温もりの波動の世界に巡り合いました。このことは、とても、とても大きな、大きな出来事です。卑弥呼の心を感じるたびに、私は、田池留吉、アルバートと呼べる、心の針を向ける、向けられることがどれだけの幸せなことなのか感じずにはいられません。

だから、私は心の針を田池留吉、アルバート、愛の方向に向け、卑弥呼の思いを心に受け、その卑弥呼の思いにこの喜びと温もりを伝えていくことを喜びと感じます。

伝えていきたい、伝えていかなければならない、そんなことを感じます。伝えていくことが私の

喜びなんです。卑弥呼の心に、少しでも喜びと温もり、安らぎ、本当の幸せを広げて、自分の本当のふるさとへ帰っていこうと呼びかけ、そういう思いを流してまいります。

長い、長い時をかけて心に培ってきたエネルギーを、今ようやく明るい光の中で、しっかりと見つめることかできる今です。本当にありがとうございます。

祭祀をおこなう巫女の埴輪（今城塚古墳）

四　卑弥呼を題材にして、反省と瞑想の時間を持たれていると思います。

卑弥呼が巫女を利用して、己の権力、己というものを誇示しようとするエネルギーを、自分の中の卑弥呼から感じてこられたと思います。

では、反対に巫女はただ利用されていっただけ、そして用無しになれば、捨て去られただけ、哀しくて辛い巫女の心、あるいは恨みと呪いだけの心の中に自らを苦しめていっただけなのでしょうか。

巫女の心を聞いてください。

巫女は確かに悲しくて苦しくて辛くても、どんな困難にも打ち勝てるように教育されてきました。それはただひたすらに神の声を聞くという修行です。その中で巫女として培ってきた心、エネルギーもまた凄まじいものだったはずです。私は利用されているのではない、卑弥呼を操っているんだ。我こそ神なり、私は卑弥呼の上に行くもの、そのようなエネルギーを流しながら、形の上では卑弥呼に仕えてきたのです。

そのエネルギーを、それぞれの心でもっと深く味わっていきましょう。

巫女の心も卑弥呼に負けず劣らず凄まじいものです。ただ年端のいかない幼少の身で親元から引

き離され、ひたすら神の声を聞くという訓練を強いられたということかもしれませんが、しかし、巫女はしたたかです。

どんなに蔑(さげす)まれても生き延びる術を自ら培ってきました。

己の呪術に身を滅ぼしていった末路ですが、その中で培ってきたエネルギーは、卑弥呼以上の巫女もありました

卑弥呼を陰で操る巫女のエネルギー、パワー。卑弥呼以上に、ブラックパワーをもって、すべてを牛耳ってやる、我一番なり、そんな巫女達の心の中でした。すべては真っ暗闇、闇黒の中でした。そのことに全く気付かずに、ただ闇に心を売っていた愚かな自分達でした。

五　アルバートを呼び瞑想を重ねます。

湧き上がる喜び、温もり。私の中には、

ただ、田池留吉、アルバートと呼べる私があります。

私は、田池留吉、アルバートと呼べる喜びの中にあります。

お母さん、ありがとうございます。ありがとうございます。

私の中の愛を思える喜びです。愛は私です。愛のエネルギー、パワーは私そのものでした。愛に帰る道。自分自身に帰る道。

卑弥呼よ、私達は今、田池留吉のもとで愛を学んでいます。本当の私達を学んでいます。私達の心の中には愛、その喜びと温もり、愛のエネルギー、パワーがありました。あなたの心の中にもあります。私達はあなたと一つなんです。私はあなた、あなたは私、そんな一つの世界を心で学ばせていただきました。

卑弥呼の意識に語りかけます。私の中の卑弥呼の意識に語りかけます。

苦しい、苦しい中を生き抜いてきた意識でした。しかし、私の中の愛に目覚めた私は、あなたの意識に語ります。

あなたは私、私はあなた、私達は一つ、ともに心を見て、ともに愛に帰ってまいりましょう。本当の自分を呼び起こしましょう。私達は一つです。本当の自分に帰るために、今、私はこうして肉体を持って学ばせていただいています。そして、肉体を持たないあなたに今、伝えます。卑弥呼という意識に伝えます。卑弥呼は素晴らしい意識ではありませんでした。

我を認めよ、我一番なり、我は素晴らしい、我は神なりの思いを抱え、あなたは、どこまで、どこまで苦しんでいくのでしょうか。

私はあなたに伝えます。しっかりと伝えます。

あなたの心を感じてきました。それは私の心でもありました。私とあなたは一つだからです。私とあなたは一つ。一つの中で、私は私に目覚めました。私の中の愛に目覚めました。だからあなたに伝えることができます。しっかりと、はっきりと伝えることができます。

私達は愛。愛は私達。私達の中にすべてがありました。あなたの中の愛に目覚めてください。愛、そのエネルギー、パワーに目覚めてください。

そして、ともに、ともに、自分自身に帰る道をともに、ともに歩いてまいりましょう。これから二五〇年、三〇〇年、次元移行を目指して私達はともに歩いてまいりましょう。

私達は愛に帰ることを約束してきた意識です。

私はこうしてあなたに伝えられることが喜びです。

こうして肉体を持ち、あの懐かしいあなたのふるさと、私のふるさとをこの肉体を通して感じさ

せていただきました。

今、私はその喜びを感じています。あの地は喜びでした。卑弥呼、あなたが生まれ育ったところは喜びでした。あなたとともに私はあります。

私はあなたとともにあります。心にしっかりと感じさせていただきました。卑弥呼、もうあなたは愛に目覚めていく道に入っているんです。私はあなたに伝えます。

田池留吉、アルバートに心を向けなさい。

田池留吉、アルバートはあなたの中にあります。心の中にある喜びと温もり。限りない愛のエネルギーの中に私達はあったんです。そう私はあなたに伝えます。

私は卑弥呼と呼ばれし意識

間違って、間違って存在してきたことを伝えていただきました。ようやく、私の中に一筋の明かりが点りました。心を見つめてまいります。卑弥呼という意識は暗闇の中に落ちました。

心の中をしっかりと見つめることをやってまいります。卑弥呼は素晴らしき、神に選ばれた意識ではございませんでした。

私は心の中に愛を灯す意識だと知りました。

心の中に私は喜びの思いを広げてまいります。

母に思いを語ります。お母さん、間違ってきました。

母を見下げ見殺しにしてきた私の中が間違ってきました。苦しかった、お母さん。苦しかった。母を呼べなかった。母を呼べなかった。

私の心は冷たい、冷たい氷のように冷たく、闇黒の中で苦しみ抜いてきました。母を、母を呼んでまいります。母を呼んでまいります。お母さん、私はお母さんを呼びたかった。心の中に呼びたかったです。

私も母のもとに帰りたかった。ただただ素直に母を呼べる私になりたかったです。

六　私は卑弥呼と呼ばれた意識。

心の中にある喜びを感じてくださいと伝わってきます。

心の中の喜び、温もり。それは私なんでしょうか。私は苦しい、苦しい、本当に苦しい中にありました。心を、固く、固く、閉ざした中にあったことを伝えていただきました。しかし、私の中にも、本当の喜びと温もり、開かれた世界があることを知ってくださいと伝わってきます。

卑弥呼の心を語ってくださるんですか。とても、とても嬉しいです。

私はこの喜びと温もりが自分であったことを信じていけることを、今、少しずつ心に感じ始めています。

私は本当に何度も何度も転生をしてきました。しかし、誰も、何も、私は何も伝えられなかった。あなたの中のお母さんに心を向けなさいなんて、誰も教えてくれなかった。伝えてくれなかった。

だから、私は生まれて死んで、生まれて死んで、小さな中にただただ閉じ籠っていただけでした。

ようやくあなたの中を広げていきなさい、あなたの中には限りない喜びと温もりがあるんですよと、伝えていただいたんです。

この喜びと温もりを私だと、私に伝えていけばいいんですか。

そうですよ。あなたの中に確かにある喜びと温もりを、自分の中に伝えていきなさい。
そのように伝わってきます。

卑弥呼よ、卑弥呼。あなたの中をまだまだしっかりと語らねばなりません。苦しい中にあったあなたの思いを、どうぞ、しっかりと自分の中で見つめてください。
あなたの中の喜びと温もり、母の思いは確かにあなたの中にあります。
しかし、あなたがあなたの心を自分で語ることがなければ、その喜びも温もりも、母の思いもまだまだ小さなものでしかありません。あなたの心に作ってきた神の世界を、どうぞ、どうぞ、自分の中から崩していってください。

何も知らなくて存在すれば、ただただブラックを積み重ね、広げていくだけの人生でした。
私は卑弥呼の人生、卑弥呼自身を心に感じたとき、本当にそうだと思います。
田池留吉、アルバートという真なる自分を心に知らずにいる時間の中で、何をどのように伝えようが、神、神と求めようが、自分の中はただただ暗闇。真っ暗な中で己というものをしっかりと抱えて、小さな世界に閉じこもっている、それが人間の姿でした。
その中から自分を解き放していくことは、本当に大変なことだと私は心で知りました。
今だからこそ、このように一つの肉体を持って、田池留吉、アルバートの波動を心で感じられ

るんです。

このチャンスを、私は本当にありがとう、ありがとうと、ただただ受けていくだけです。

心の針をしっかりと向け合わせていくと、小さく凝り固まっていた卑弥呼の心の中にさえも届いていくことを私は、知りました。

すごい、エネルギー、パワー。愛のエネルギー、パワーが卑弥呼の心に届いていくこの現実を、私はしっかりと感じています。

淡々と私は伝えていける。どうしても、どうしても、ともに帰りたいという思いがあるからです。

間違ってきたのはみんな同じです。

何も知らずに存在していただけのことでした。今、この肉体を通して、真実の世界が明らかになってくれれば、私は、地獄の奥底に落ち、沈み込んでいる意識達に伝えてまいります。伝えることが喜びとして私の心の中に広がっていきます。淡々と伝えること、それは田池留吉、アルバートの中に私達があったことを信じる信の強さです。

その信を深めていくことが私の喜びです。苦しい、苦しい真っ暗な闇黒の世界にあった意識達を感じていくことは喜びです。

心の中には何もありません。ただ伝えていく、広げていく、自分の中に愛という喜びのエネルギーを流していく、ただただそれだけです。

私のこれからの時間は、ただただそのことをやり続けてまいります。

七　卑弥呼には昼の顔と夜の顔がありました。

昼は、神に仕える身として、巫女達の力を利用し、我は神なりとその力を民衆のもとに示していきました。

その姿をみだりに公衆には見せないけれど、いかにも国を治める長として、そういう雰囲気を作り、そういう雰囲気を醸(かも)し出す舞台背景の中、「卑弥呼は素晴らしい者だ」と皆の心に植え付けていきました。

そして、一方、夜の顔がありました。巫女を手玉に取ったように、男どもを手玉に取った卑弥呼の姿でした。

卑弥呼は権力者と繋がっていきました。その権力者の力を利用していきました。

神がこのように私から伝わっています。私は神の化身ですと卑弥呼は男どもを手玉に取っていったんです。

この心はとても凄まじいものでした。色香に狂う男どもを冷ややかな目で見つめる卑弥呼がありました。卑弥呼の心の中は、人を愛することができないほど冷たい、冷たいものでした。

男は私の奴隷。我にかしずけ。ただ権利と財力をこの手に集めるための手段であると冷ややかに

計画をしながら、その者の持てるものをみんな吸収するまで、自分に心を向けさせました。神という言葉を使って。

卑弥呼は、時には己を使い、そして時には巫女達を使い、男の心を腑抜(ふぬけ)けにさせていきました。すべては色と欲で繋がる真っ黒な世界を、卑弥呼は楽しんでいたかのようにも思います。

心の中を見ることを知らなかった卑弥呼の哀れさです。

冷たい、冷たい心に成り下がったから、何も信じることはできなかった。たとえ、心から卑弥呼に忠誠を誓う人物が目の前に現れたとしても、卑弥呼の心は動かされなかったでしょう。

卑弥呼は神だけを求めてきました。神を求める心はとても強かったです。神は唯一私を裏切らない。神は私なのだから。私は神と一つなのだから。神とともにある私は何も必要としない。

そんな卑弥呼の心を、私は今、感じて、それでもなお、卑弥呼に伝えることができます。

間違っていると。そのあなたの心は間違っている。しかし、あなたの中の苦しみ、暗闇は、あなたの中で喜びと温もりへ帰していけることを伝えています。

琴を弾く男性の埴輪

八　間違った神を神として伝えてきた大きな過ちは、自らを地獄の奥底の底のまだもっと底に突き落としていきました。

大罪人でした。巫女を利用してきたとか、男どもを手玉に取ってきたとか、首をチョンチョン刎(は)ねたとか、そんなことよりも、間違った神を神として伝えてきた大きな過ちを、過去、繰り返し犯してきたことに対して、どれだけ自分に懺悔してきたか、そういうことだと思います。

田池留吉、アルバートを思い、卑弥呼と思うとき、泣けてきます。

どんなに大罪人であったのか、それでも私は、今こうして肉体を持って大きなチャンスを得ています。

間違った神を神として伝えてきた過ちに自ら気付き、自らに懺悔するチャンスを自分に用意しました。それが今世の学びでした。

田池留吉を通して、真実の波動の世界を学ぶという絶好のチャンスを用意しました。私、田池留吉に心を向けなさいというメッセージがいかに愛であるか、本当にありがとうだけでした。

卑弥呼が語ってくれます。

私は女王、卑弥呼。卑弥呼の世界を作り続けてきました。卑弥呼の世界を広げながら私は転生を繰り返してきました。

卑弥呼の心はそのままでした。私はいく度も、いく度も肉体をいただきました。そのたびに地獄の苦しみを味わってきました。

卑弥呼の時代はよかったと私は卑弥呼の時代を懐かしく思う時がございました。

なぜ私はこんなに苦しい目に遭うのかと、私は素晴らしいのにと、そんな思いの中で私は苦しみ続けました。

今、卑弥呼の心を語ることは私にとって、本当に喜びとなっています。

私の心の中を全部明るい温もりの中に出していくことが、本当に喜びであり温もりであることを伝えていただきました。

卑弥呼は間違っていると真正面から伝えてくれました。

そうです、私はそのように自分に伝えたかったんです。私は間違っていたんです。間違っていたことを自分に伝えたかったけれど、私にはその勇気がありませんでした。

私は私を見つめる勇気がありませんでした。私は素晴らしい者、神の化身だとしてきたことが私の頼りでした。私はその思いをずっと、ずっと心に秘め転生を繰り返してきました。卑弥呼は素晴らしい者ではありませんでした。本当に地に落ちた私でした。地獄の奥底を這いずり回っていると言ってもらいました。そうです。その通りです。私は地獄の苦しみを味わい続けました。私はすべ

てを、すべてを呪ってきました。こんな苦しい私はどうしても自分で受け入れることはできませんでした。私の苦しみは自分を受け入れることができなかった中にありました。

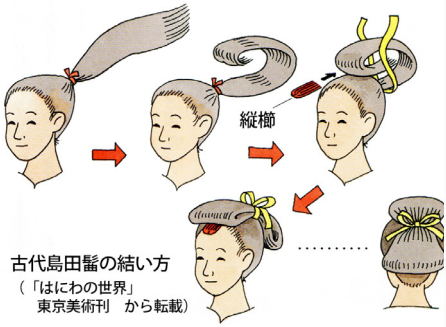
苦しみはそうでした。自分を受け入れることができなかった。

こんな苦しい、苦しい、みっともないみすぼらしい自分を、どうしても、どうしても、私の中で受け入れることができなかった。私は自分自身が間違っていることを認めることができなかった。それが苦しみでした。伝えていただいた通りです。自分を自分で受け入れることができなかったことが苦しみでした。

今、今、少しずつ、少しずつ、苦しみを吐き出しながらも、その吐き出したところから優しい思いを感じます。温もりを感じます。ああ、これで私は少し楽になれます。

自分を苦しめてきたのが自分だったということが、全く私には分かりませんでした。

琴を弾く男性の埴輪



古代島田髷の結い方
（「はにわの世界」
東京美術刊　から転載）

◆畿内の巫女の衣装

作画：金 斗鉉
元画：若狭 徹

装いの手順

①まず下衣を着て、両肩に襷をしめる。
②その上にショールのような祭服うぃまとう。
③祭服をまとめるため、帯をしめる。

＊祭服…長方形の大きな布の長い辺の端と端を結び、頭を通したもの。

巫女の衣装の再現／古代島田髷（上の図）／意須比（オスヒ：祭衣の一種で上衣の上に巻く布帛）を着た上にたすき掛け（中央の図）／足玉を二重に巻いているのは、巫女の中でも中心的な人物（下の図）／ＮＨＫ制作

九　卑弥呼。長い、長い時を経て私達は出会いました。

あの飛鳥の地で、私達はともに、神に忠誠を誓った仲間です。

私達は、心を闇に向けました。もちろん、闇とは思いもしませんでした。神に忠誠を誓う者、その思いのままに、私達は自分の肉体を動かしました。

心の中から凄まじいエネルギーを流してきました。

「我の言うことを聞け。我の語る言葉は神からの言葉。これに逆らう者は、即刻地獄に落ちろ。我は国を統治する者。我の言うことに従えば、すべてはうまくいく。すべてを支配するこの力を見よ。この力を以て、この国を治めん。

我らはこのエネルギー、このパワーを、この国にもたらす者。」

私達はそのように、民に言葉を発してきました。

大きな力を示してきました。

その陰に哀れな巫女達の姿がありました。あの者達を利用して、我らは、ここに、この国を大きなものにしていこうと誓い合ったのです。

卑弥呼の中には野望がありました。野心がありました。

卑弥呼の名を轟(とどろ)かせたい。海を越えてこの名を轟かせたい。この国を治め、そして海を越えて我の名を轟かせたい。そして、海の向こうの国の民もすべてこの手の中に牛耳って、己の帝国を築きたい、そんな野望がありました。

しかし、今思えば、それは、とても、とてもちっぽけな世界のことでした。

田池留吉、アルバート、私達の本当のふるさと、母なる宇宙へ心を向け、その波動を感じていったとき、私達の心の中に作り続けてきた思い、その支配力、エネルギー、パワー、素晴らしいとしてきたパワーは、本当にちっぽけな、ちっぽけなものでした。

卑弥呼よ、私達は間違ってきたんです。そう、私達は間違ってきました。

あなたは母を呼べないと言いました。私は、母を呼んでくださいと言いました。

私も母を呼べなかった。私の中に、母は、見下す愚かな存在でしかありませんでした。

いいえ、殺して、殺して、殺しまくってきたそんな母親を、どうして心の中に呼べるものか。母に逆らってやる。どこまでも母に逆らってやると、そのように、私は、田池留吉に伝えました。

田池留吉から返ってきました。

そんなあなたの中に、私は「母を呼びなさい」と伝えます。あなたの中の喜びと温もり、限りない優しさを私は信じています。あなたは私、私はあなた、私達は一つ。

その思いを心に感じたとき、私は何と愚かしい私だったことかと、本当に自分に懺悔でした。

だから、私は、今、時を経て、あなたと出会えて、本当に私が今、学ばせていただいていることを、

あなたに伝えたいと心から思いました。
そのための準備が、私がこの学びに集う前に、私達が生まれ育ったあの地を、何度も、何度も行き交いしてきた私の心でした。
「苦しかった心をこれから見ていくよ。」
あなたに伝えていたと思います。
あの二上山を眺めながら、私はどんな思いでこの学びに集いたかったか、この真実の、田池留吉の波動に触れたかったか。アルバートの世界に触れたかったか。そんなこととはちっとも知らずに愚かな肉の時間を経て、ようやく私は、この学びに集えたんです。
今、私は卑弥呼の思いに心を向ける時間をいただいています。
卑弥呼は喜びです。私も喜びです。
喜びと喜びの中で、田池留吉、アルバートを思える喜びの時間を今いただいています。
ありがとう、卑弥呼。本当にありがとう。心の中に私達は喜びだった。私達は温もりだった。ともに、ともに帰りましょう。いっしょに帰りましょう。はい、邪馬台国、卑弥呼、そして私達のふるさと、飛鳥の地。あの二上山とともに、母なる宇宙へ帰りましょう。

十　神のお告げの「神」とは何ですか。
神とは存在するのですか。

神のお告げを聞こうと、心の中にしっかりと神のお告げを聞こうと必死になって、修行をしてきた巫女達の思いを感じます。

その意識に、「神とは何ですか。神は存在するのですか」と聞きました。

「初めて、初めて、そんな問いかけを自分にしてみました。

神とはいったい何だろうか。本当に神はこの世に存在するのか。

これまで、ただの一度も自分の中にそんな疑問が湧いたことがありませんでした。神は存在する。神に向けて自分の心に神のお告げを聞く、その使命があるとばかり思ってきました。神は存在すると確かに、確かに信じていた。信じていなければ、私というものがない。そこまで私は神を信じてきました。そんな答えを心に返しながら、私は神を求めてきたんです。神の声を聞くために、私は修行をしてきた。」

そんな巫女達の思いが伝わってきます。

とても、とても、苦しくて暗くて閉ざされた中で、「神を、神を、神を」と求めている、そんな思いを感じます。

私は自分の中を感じてきました。私の中にも、もちろん、巫女としての転生がたくさんあります。巫女をたくさんやってきました。卑弥呼という地位に昇りたかった。

卑弥呼と崇め奉られたかった。そして、私の霊能力でのしあがろうとする思いに、自分を苦しめてきた過去の私を感じてきました。

私はその自分の中の思いを、しっかりと今世、感じさせていただき、それが間違ってきたこと、本当に間違っていたことを知りました。

今、「神とは何ですか。神は存在するのですか」と自分に問いかければ、私の中に明確に答えが出てきます。

神は存在しません。私達が求めてきた神とはブラックのエネルギー。

もともとないものを求めてきた。求める心がブラックだったんです。なぜ求めてきたのか。欲があったからです。己を高め、己を高きに置きたかったんです。己を捨て去ることができずに、己を掲げ、己を高めていく、闘いのエネルギーの中で求めてきた、その心の中は真っ黒です。真っ暗です。そこからどんなに神のお告げだと言葉を発しても、そのエネルギーは真っ黒なエネルギー。

そのことを、私は今世学ばせていただきました。だから、卑弥呼に心を向けた時、確かに卑弥呼という意識の世界を語ります。語るけれども、私の中には何もありません。ただそうだったと、そのことを淡々と語るだけです。

卑弥呼は、孤独でした。卑弥呼は小さな世界に自分を押し留めて、ただ、表面だけを素晴らしき者だと作り続けていかなければならなかったんです。そんな、哀しい、哀しい人生を送り続けてきたのが、卑弥呼という意識。卑弥呼だけではありません。世の中に名の知れた人物はすべてにおいて孤独でした。

その己を崩すことは容易ではありません。孤独で、孤独で、しかし、そんなことは表面に決して出せないことでした。

だからこそ、余計に哀れだったんです。

神は存在するのか。いいえ。

神とは何か。本当の神。それは私達の心の中の温もり、喜び、広がり、安らぎ。私達自身がそういう存在だった。それを私達は、今、愛と表現しています。愛のエネルギー、パワー。私達がもともと持っていたものでした。それが私達だったんです。そのもともと持っていた自分を捨て去って、ブラックのエネルギー、パワーを長い、長い時をかけて求め、求め、そして積み重ねていきました。愚かなことを繰り返してきたんです。

しかし、全くそれが愚かだったということに、ただの一人も気付けませんでした。

十一　卑弥呼と呼ばれた意識へ。

今、あなたは母を呼べますか。お母さんを呼べなかったあなたでした。お母さんと、心を向けてみてください。あなたの中に何が伝わってきますか。

ああ、お母さん。ただただ優しい、優しい思いが伝わってきます。お母さんに抱かれていた頃の私を、今、思い出しています。

お母さんと呼べなかった心を、その中に見てごらんと伝わってきます。

私は自分の中を閉ざしてきました。

閉ざしているという感覚すらなかった。ただ私は、この私を大きなものとしてとらえてきました。そのとらえ方が間違ってきた、そんな気がします。

神を間違ってきたように、自分自身を間違ってとらえてきました。

私は、この母の中にある安らぎ、それを忘れてきた。安らぎ、私の中にあったんですね。こんな安らぎがあったんですね。

いつも、いつも、心の中は穏やかではありませんでした。

なぜ、こんなに神、神と求めてきたのに、私の心は、落ちていくのだろうか。私には、全く分かりませんでした。

今、母を呼んでごらん。そんな思いに、私は、お母さんと自分の中に呼びました。

ただただ優しい、優しい、本当に優しい、優しい思いだけが広がっていきます。

この中にずっと、私はいたかった。こんな中にあった私を、初めて感じました。

はい、何もない世界がありました。静かに、静かに広がっていく。ただただ静かに広がっていく。何もありません。何もないけれど、私はただただ広がっていくことが嬉しい。そんな嬉しい世界を感じています。

ありがとうございます。お母さん、ありがとう。ああ、ありがとう。

お母さん、ありがとう。

田池留吉、アルバートに出会っていってください。あなたはこれからも幾度か転生されるでしょう。あなたの意識の変革を私達は願っています。意識を変えていくこと、その肉があなたではなく、私はこの意識の世界に生きていることを、あなた自身の心で知っていくために、あなたは、これから、いく度かの転生を経て、私達との出会いを持つと思います。

どうぞ、どうぞ、その間、あなたの中の変革を推し進めてください。私達は待っています。心の

中に広がる思いはあなた自身です。そして、それが私達です。一つだと伝えさせていただきました。一つの世界をどんどん、あなたの中に信じていってください。

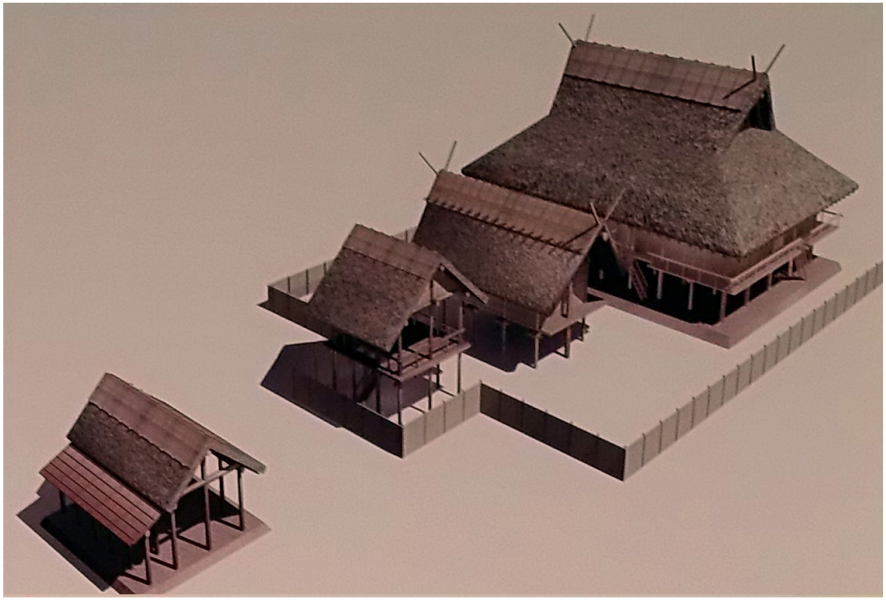
今、私達はあなたに伝えます。

嬉しい、喜びの思いはあなたの中にありました。その喜びと温もりの中にあなたが作ってきたエネルギー、あなたという世界を帰していきなさい。包んでいくのです。

卑弥呼は間違ってきました。卑弥呼というエネルギーは、宇宙にそのまま真っ黒なエネルギーを流して続けてきたけれど、今、私達は伝えます。

そのエネルギーを、あなたの心の中で回収していきなさい。あなたは出来るんです。あなたは愛だからです。

大和発祥の聖地（桜井市）から二上山を臨む



卑弥呼の館と思われる纒向遺跡　居館の復元模型

十二　卑弥呼に思いを向けて、
卑弥呼に私の心を語ります。

私はこのまま、このまま、ずっと、ずっと、このまま、私の中の喜びと温もりを見つめ、存在してまいります。あなたもそうしてください。

卑弥呼よ、あなたの思い、エネルギーは私の中に届きました。

私も同じブラックのエネルギーを流し続けてきました。卑弥呼という意識、エネルギーは私の中にありました。

そして、私はそのエネルギーを自分の中の喜びと温もりで包み、ともに帰ろうと伝えています。

心の中に愛、本当の自分、喜びと温もり、広がる心、広がる世界、限りない優しいあなたがあります。そのあなたであなたを知っていってください。そのあなたであなたを包んでいってください。

愛のエネルギー、パワーは、その仕事をしていきます。心を向けていきましょう。田池留吉、アルバート、本当のあなたに心を向けていきましょう。

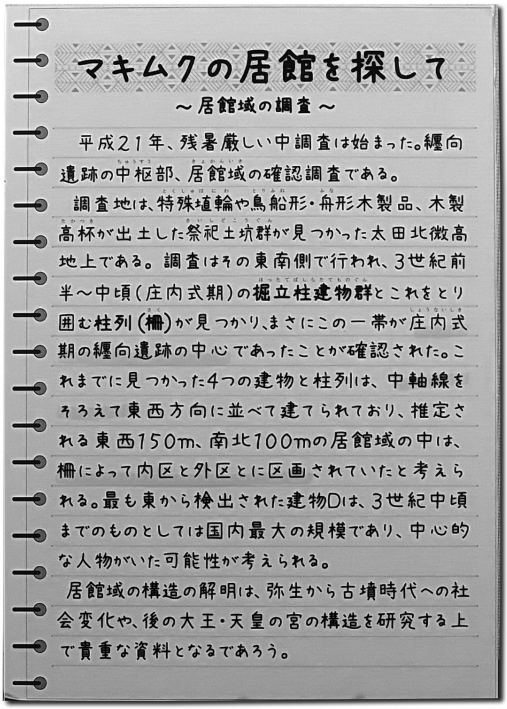
地獄の奥底を這いずり回ってきた私の中に届いています。しっかりと届いています。ありがとう。

私はこのエネルギーを知っています。この思いを知っています。母の中にあった私でした。母の中で、私はこの思いを感じさせていただいてきました。ようやく、ようやく自分の中から、その思いが出ることを知りました。心の中を見つめてまいります。

これからの時間の中で、私もともに歩かせていただきます。

ありがとうございます。ありがとうございます。心を見つめてまいります。私は意識、エネルギー。愛を灯すエネルギー、パワーでした。

心の中を見つめてまいります。私の中を見つめていきます。



マキムクの居館を探して

～居館域の調査～

平成21年、残暑厳しい中調査は始まった。纒向遺跡の中枢部、居館域の確認調査である。

調査地は、特殊埴輪や鳥船形・舟形木製品、木製高杯が出土した祭祀土坑群が見つかった太田北微高地上である。調査はその東南側で行われ、3世紀前半～中頃（庄内式期）の**掘立柱建物群**とこれをとり囲む**柱列（柵）**が見つかり、まさにこの一帯が庄内式期の纒向遺跡の中心であったことが確認された。これまでに見つかった4つの建物と柱列は、中軸線をそろえて東西方向に並べて建てられており、推定される東西150m、南北100mの居館域の中は、柵によって内区と外区とに区画されていたと考えられる。最も東から検出された建物Dは、3世紀中頃までのものとしては国内最大の規模であり、中心的な人物がいた可能性が考えられる。

居館域の構造の解明は、弥生から古墳時代への社会変化や、後の大王・天皇の宮の構造を研究する上で貴重な資料となるであろう。

1971年以来、調査回数100回を超える纒向遺跡（奈良県桜井市）の発掘調査。中でも2009年の調査で、当時最大級の居館跡が発掘された。それでも全体の5％といわれており、ここが卑弥呼の都（邪馬台国の中心）であったことは、ほぼ確定したと言えそうだ。

十三　卑弥呼を愛しく、愛しく、ただただ愛しい思いで呼べること、今、喜びです。

卑弥呼は、私の心の中のエネルギーを感じさせてくれるものでした。

卑弥呼は、私にとって特別な存在でした。しかし、私は、今、その卑弥呼を思い、卑弥呼に伝えることができます。

喜びと温もりを伝えることができます。卑弥呼へと心を向けてきた私の中に、喜びと温もりを伝えることができます。

私はこの喜びと温もりの中にありました。

求めなくてよかった。何も求めなくてよかったんです。ただただ自分を思えばよかったんです。

自分の中には溢れるほどの喜びと温もりがありました。

温もりです。母の温もりが私の中に生きていました。私は母の中にありました。ただただこの喜びと温もりを心に持って、私はこれからも存在してまいります。

たくさんのたくさんの転生を経て、たくさんのたくさんの人達に間違いを伝えてきて、それでも私は愛だから、こうして今、肉体を持たせていただきました。

肉体を持って自分の作ってきた間違ったエネルギーを心に感じ、そのエネルギーは自分の中の愛で包んでいける、自分の中に包んでいけることを知ったこと、私は本当に嬉しいです。

今、卑弥呼を思いながら、そして、田池留吉を思い、宇宙を思いながら、そしてＵＦＯ達と交信しながら、私は、日々、瞑想を続けています。

どんなにしても分からなかった世界。その世界を今、心に感じられることが幸せです。

田池留吉、アルバート、心から、心から呼んで、呼んで、呼び続けていけることが嬉しいです。幸せです。ありがとうが伝わってきます。

思いを向けると「ありがとう」が伝わってきます。

ありがとうございます。ありがとうございます。

樽型はそう（中央の穴に栓をして飲み物を入れる容器と使ったと考えられている。神戸市埋蔵文化財センター蔵）

樽型はそうを捧げ持つ女官

十四　卑弥呼へ心を向けます。

私は喜びで、喜びで、卑弥呼を思い、喜びで卑弥呼を呼びます。

はい、卑弥呼は語ります。

私の中にあった喜びと温もり、愛のエネルギー。私はしっかりと心に感じ、そして、私は私の間違いに少しずつ、少しずつ気付き始めています。そんな私がありますと、卑弥呼は返してきます。

卑弥呼の意識を、私はさらに思います。

たくさんの間違ってきたエネルギーを、あなたの心の中に、ともに、ともに呼んで、そして、愛のエネルギーを流していってください。

あなたの存在を、まだまだ特別だとしている意識達はたくさんいます。

その卑弥呼の像を崩していってください。

そんなエネルギーは本当に間違いだった、あなたの中に確かな喜びと温もり、母の思いがあることを、あなた自身が伝えていってください。

卑弥呼よ、卑弥呼。私達は一つです。一つの中にあった喜びと温もりを、今、あなたに伝えます。

十五　田池留吉を思い、卑弥呼を思います。

私は卑弥呼。私の中にあった温もりが私をいざなっています。今、静かに、静かに広がっていく中で、私は私を見つめています。愚かなことを繰り返してきました。申し訳ございません。

私は私を知りませんでした。私の中にあった喜びも温もりも、私は知りませんでした。

私が求めてきた神は、本当の神ではありませんでした。愚かな私が作り続けた世界。喜びとはとても、とても言えない真っ黒な中を、私は生き続けてきました。

私は神を知らないと言えなかった。私は神に逆らうことを恐れてきました。神に逆らえば、私はこの私がどうなるのか、とても、とてもそんなことはできませんでした。

だから、私は必死に、必死に神を求めていきました。そんな私の過去でした。

私は卑弥呼という意識の世界を作り続けてきました。

ない神をあるものとして伝え続けてきた愚かな存在でした。

そのことに気付いてくださいと伝えていただいています。

あなたの中の喜び、温もり、広がる心、それがあなたですよと伝えていただいています。

それが神と言えば神なのですね。私の中にあった。私の中にあったんです。私自身でした。私は私を知りませんでした。

愚かなことをやり続けてきました。申し訳ありません。哀しい、哀しい私の思いを語らせていただきました。

哀しく辛くて苦しい中で、ようやく、私は自分の間違いを見つめることができる時期にきたんです。伝わってきます。喜び、温もり、優しさ、目覚めてくださいと伝えていただきました。愚かな私を見つめてまいります。

田池留吉に心を向け、もう一度卑弥呼を思います。

卑弥呼を語ることは喜びでした。卑弥呼を思うことは喜びでした。

少し心を広げてくれているようです。伝わっていることを語ってくれています。喜び、温もり、優しさの中にあったことを、もっと、もっと信じてほしいと思います。そうすれば、どんどん意識の世界が変わっていきます。大きな闇の部分が少しずつ変わっていけば、そこに繋がっている意識達に揺さぶりをかけることができます。

流れをせき止めるのではなく、ただ流れを素直に流していくことを卑弥呼に伝えました。卑弥呼に伝えたことが喜びです。伝えたことを素直に受けて、そして、ともに歩んでいこうとしてくれています。意識の変革を促してまいります。

十六　私の中の卑弥呼を思い瞑想をします。

私の中にようやくようやく、安らぎが蘇ってきます。心の中にありました。私は、ああ、この安らぎを求めてきました。お母さん、お母さん、そんなふうに、ただただお母さんを呼びたかった私があります。

小さかった頃、私は「お母さん」と素直に呼んでいた。なのに、私は、いつの間にか、「お母さん」と呼べなくなってしまった。

そんなに私は偉いのですかと、私は私に尋ねてみました。

そう、あなたは偉く、偉くありました。あなたは神より言葉を賜りし者。そのように私の中から伝わってくる私を感じてきました。全く愚かなことでした。

私はこの暗闇の中に、真っ暗闇の中に自分を落としてしまったんですね。今、私はようやく、この静かな、静か

祭りの場での神事　立っているのが巫女（NHK 作成の CG）

な広がりの中で、私を思うことができます。私は私に申し訳ない。本当に申し訳なかった。自分を知らずに存在してきたことが愚かでした。

卑弥呼よ。はい、もっと、もっと心を広げていけるんですよ。あなたの中は、もっともっと広い世界があります。あなたは今、安らぎと言いました。その世界はまだまだ、とても、とても小さな世界です。もっと、もっと大きな世界に、あなたは存在しているんです。それがあなたです。

今、私達はその愛の世界を学んでいます。「愛」と、心を向けてください。そして、田池留吉、アルバート、お母さんと呼んでください。

愛と思い、田池留吉、アルバート、お母さんと呼んでみてください。

私は、何もありませんでした。私の中には何もありませんでした。私は卑弥呼という名前にこだわっていた自分を感じます。この広い、広い中に、私はああ、存在していたんですね。ただただ、ただただ広がっていく。優しい、優しい中に私は広がっていきます。

琴を肩に担ぐ男性

十七　苦しくもあり、哀しくもあり、
しかし、私は卑弥呼を思うこと、
卑弥呼と思いを向けることが嬉しかったです。

「意識の転回」の本の朗読を終えてすぐに、卑弥呼に向けるお勉強が始まり三週間が経ちました。

私の過去は、ずっと間違った神を神としてきました。その中で心に響いてきたものを、自分の口を通して語ってきた過去。その過去をしっかりと見つめて、今世、私は自分の中を修正することを約束して生まれてきました。

田池留吉の出会いにより、私の過ち、間違ったものを伝えてきたという過ちを自分の中でしっかりと確認し、そして、それがどんなに凄いエネルギーを宇宙に流し続けてきたかを確認してきました。

その自分に対して心から詫び、また、その自分を愛しく自分の中で包み、本当の自分に目覚めるために、私はこうして、田池留吉の肉と出会い、学びをしてきました。

ありがとうございます。

徹底的に、田池留吉に歯向かい、母の温もりを否定してきた自分に出会わせていただきました。

愛の中にあったから、そんな自分と出会い、そんな自分を知り、そんな自分に本当のことが伝え

ることができたんです。

私は、そのことを思うたびに、本当に幸せ者だと思っています。

私は、私の中にチャネラーだという思いは今もありません。

もともと、私の思いは、自分がチャネラーになって、どうこうするというのではなく、ただ、自分は、過去間違ってきたことを、本当に自分の中で見つめていきたかったんです。そして、私は、田池留吉に心の針を向け合わせて語ることこそが喜びだと、本当に知ったんです。

過去、間違った神を心に信じ、神の言葉を伝えてきたことについて、今、形は、私は同じようなことをやっています。

しかし、私の心の中は知っています。

この波動、この温もり、この喜び、この安らぎ、広がり、そこからくる波動の違いを、私は今世の肉を通して確認させていただきました。これが私の学びでした。

だからこそ、私は田池留吉、アルバートのメッセージを波動として受けていますし、これからも受け続けていきます。

私が心に受けている波動は、まさしく、田池留吉、アルバート、本当の自分からの波動、エネルギーだと確信があります。

この波動、エネルギーを、ただただ伝えていく、流していく、それに喜びを感じている私です。

間違ったものを伝え続けてきた愚かな過去を学ばせていただき、そして、私は、私の心は、

二五〇〇年、三〇〇〇年後へ続いていくことをしっかりと感じ、ただただ心の針を向け合わせていく喜びの中にあります。

弥生時代の楼閣（唐古・鍵遺跡）

十八　今、私の中に卑弥呼を呼んでみます。

田池留吉、アルバート、お母さんと呼んでくださいと卑弥呼に伝え、そして、私は私の中の卑弥呼を呼んでみます。思ってみます。

ありがとうございます。私は卑弥呼と呼ばれた意識。その意識の世界を語ってまいりました。私の中に喜び、温もり、母を呼べる素直な私があったことを感じさせていただきました。

田池留吉、アルバートの波動を、私の心は受けさせていただきました。

田池留吉、アルバートと呼んでごらんと言われ、私はその中に思いを向けました。

私は広がっていきました。私は広がっていきました。私はどんどん広がっていきました。静かな、静かな優しい中に私が広がっていったことが感じられた。

私はとても嬉しかった。小さな、小さな中に凝り固まってきた私なのに、私は広くて、

広くて、静かで、静かで、穏やかで優しくて、何とも言えない喜びを感じさせていただきました。

ともに帰りましょう。ともに、ともに歩いていきましょう。私は伝えていただきました。

卑弥呼と呼ばれたことが、私の中で、ずっと、ずっと重りになっていました。自分を沈ませてきたんですね。私はこの広がっていく私を、心から信じていきたいと、今、思っています。語らせていただき、ありがとうございます。

心を語ることが喜びです。ありがとうございます。ありがとう、お母さん。ありがとう。ありがとう。温もりと喜びの世界が私の世界だと伝えていただきました。ありがとうございました。

弥生時代の神殿　いずみの高殿（池上曽根遺跡）

十九　今もう一度、卑弥呼を思います。

卑弥呼よ、私はあなたに伝えました。

「あなたの中の喜びと温もり、母の思いがあなたの中にあるんですよ。そのあなたを思ってください。」と。

あなたはあなたなりにその思いを心に感じてくれたと思います。

どうでしょうか。今一度、私はあなたに思いを向けてみます。

どうぞ、今のあなたの心を語ってみてください。

私は、卑弥呼と呼ばれてきた意識です。はい、私は間違ってきたことがはっきりと自分の中で分かります。

私は何も分かりませんでした。何も知りませんでした。私自身を知らなかった。そんな私を今、心に感じています。

母の思いが心に響いてきます。私はずっと、ずっと、苦しい、苦しい暗い中で固まった状態でいたけれど、母の思いを心に感じたとき、母の思いが伝えてくれているんです。

「待っています。待っています。どうぞ、心を広げてください。私の中へ帰っておいで。戻っておいで。あなたの中の喜びと温もりはあなた自身。私の思いです。私の思いです。母の思いです。」

そんな母の思いを心に感じたとき、私は本当に自分の愚かさを感じました。ああ、申し訳ございませんでした。何も分からないのに、さも神を知ったかのように、神がこのように申していますと、神がこのように、私を通して伝えてきましたと、そのように己をただただ高く掲げてきただけです。

己を前に出してきただけでした。私は何も知らないで存在していたんです。だから、私はああ、自分の中を見ることをしなかった私は、この肉体を終えたあと、暗闇の真っ暗闇の闇黒の底に沈み込んで、そこでただただじっと、じっと固まる以外はありませんでした。

しかし、今、ああ私は、伝えていただいたことをやっています。

お母さんと呼んでごらんなさいと。そう私はお母さんを呼びました。

そうしたとき、私の中に温かい思いが広がっていくんです。お母さんの思いが伝わってくるんです。

「帰ってきなさい。帰ってきなさい。」

だから、私は、母を思います。私は自分の中をじっと、じっと、今、見つめています。感じています。感じることができるようになったんです。

ああ、私はそれがとても不思議だけど、嬉しいです。

固まるしか私はなかったのに、私は、じっと、じっと、自分を見つめることができる。母の中で、母の温もりの中で、私はじっと、じっと自分を感じていくことができる。これだけ私は少し楽にな

りました。

また私に何か伝えてください。私はお母さんを呼び、じっと、じっと自分を見つめています。ああ、私は少し楽になりました。お母さんと呼んでいきます。

卑弥呼の館（復元模型　大阪弥生文化館）

二十　卑弥呼を、ようやく明るいところで語れることが喜びです。卑弥呼と思えば喜びが広がっていきます。

ともに帰りましょう。あなたもともに帰りましょう。

卑弥呼に伝えることができます。

私の中の卑弥呼は、喜びで、喜びで応えてくれます。そして、私達とともに歩いていけることを感じます。

これからの時間の中で、卑弥呼の意識は肉を持つでしょう。そして、二五〇年後に私達との出会いがあります。

私は卑弥呼に伝えます。

あなたも愛、愛のエネルギーです。愛のエネルギーを自分の中にただひたすらに広げていってください。

愛のエネルギーとは、あなた自身です。あなたの中の愛に目覚めていってください。今、卑弥呼にそのように伝えることができます。

卑弥呼、あなたは愛です。愛はあなたです。あなたの中にあった喜びと温もり。あなたの中で信

じて、信じて、あなたの中に広げていってください。私達と出会う時を、楽しみに待っています。

卑弥呼、あなたは間違って存在してきました。間違って、間違って存在してきたあなたを、私は、今、愛しく、愛しく、感じます。

喜びです。喜びです。ありがとうございます。

二十一　卑弥呼よ、語りなさい。

はい、思いを向けてくれてありがとうございます。はい、ともに、ともに帰れることを伝えていただきました。ああ、ありがとうございます。

私はお母さんを思っています。お母さんと呼んでいます。

ああ、私は、ああ、本当に、本当に長い、長い間、私は私を閉じ込めてきたことを感じてきました。お母さんと呼んで、私は自分の中を広げていっています。はい、ありがとう。ありがとう。

喜びを伝えてくれました。温もりを伝えてくれました。私は、ああ、この喜びと温もりの中で、これからも私を見つめていきます。

お母さん、私は間違ったことをたくさく、たくさんしてきました。ああ、それは私が私を知らなかったからです。今、私はこの自分の中を見つめています。私は、この中で、じっと自分を見つめていけることが喜びです。

卑弥呼よ、語りなさいと私は心を向けられた。嬉しいです。ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとうございます。

私はああ、この中で、私を見つめていける。ああ、お母さんと呼んでいける。嬉しい。ありがとうございます。ありがとうございます。

卑弥呼よ、あなたが信じてきた神の実態が、心で分かりましたか。
そして、それは本当にブラックであることを、本当にあなたの心の中に伝わりましたか。あなたは、自分がしてきた間違いがどんな間違いだったか、心で感じていますか。
私達は間違ってきたことを、あなたが心で知った分だけ、あなたに関わってきた人達の心の世界が変わってまいります。
どうぞ、どうぞ、あなたの中をじっと、じっと、しっかりと感じていってください。

神として崇め奉られたかった私の心の底の底を、感じさせていただきました。間違いを伝えていただき、ありがとう。その思いに私はしっかりと自分を寄せてまいります。その思いの中へ、自分の心を合わせてまいります。ありがとうございます。ありがとうございます

鯨面（入れ墨）埴輪
（唐子・鍵ミュージアム）

卑弥呼、悲哀から目覚めへ

初版発行　2015 年 4 月 20 日

著　　者　塩川香世
資料編集　桐生敏明
表　　紙　金子　亙

© 2015 UTA-BOOK　Printed by Japan